



# 心の歌を奏で て

---

—仮面の国—

---

①

芳田尚哉

---

鬱蒼(うっそう)とした森だった。

じめじめとして、薄暗い。

「なにか出てきそうだね」

「そうだな」

「もしかして、トールちゃん怖いの？」

「そんな事あるか」

そう言うものの、風が吹くと木が唸る。それはあの世への誘(いざな)いの声に聞こえる。

気温も低く肌寒い事もあって、どうしても震えてしまう。それをキヨカが目敏く指摘してくる

。

「怖いだったら、正直になればいいのに。私が護ってあげちゃうよ」

キヨカのにやにやがウザい。

「大丈夫だっの」

これはもう意地でしかない。男の子の意地です。強がりなんです。

こりゃ、ホラーハウス並だぞ。天然のホラーハウス。なんだか、肝試しでもしているみたいだ

。

「強がりさんだな」

キヨカのそんな呟きが聞こえた気がするが、スルーしておこう。

しかし、どういう場所なんだ？

周囲にはなにもない。いや、木はいっぱいあるんだけど。

ただ、舗装はされてないけど、それなりの道があるので誰かが通るんだろう。少なくとも獣道じゃなさそうなので、文明的なものがあるはずだ。

「それにしても、どこまで続いているんだろうな……」

「そうだねえ。恐がりさんには、早く終わって欲しいとこだよね」

「そうじゃないってのに」

思わず反応してしまう。相手にすれば、余計にからかわれるってわかってるのにな。

そうこう歩いていると、遠くに小屋のようなものが見えてきた。

「もしかして、また入国審査なのか？」

つい以前の事を思い出す。

「うっわあ、トールちゃんが余計な事言うから、思い出しちゃったじゃんかよ」

「なにがだよ」

「屋台だよ、屋台。結局、全制覇できなかったんだよ」

「……お前なあ」

今それを言うのか。

確かに、屋台は制覇できなかった。俺だって悔しい。

だけど、もうどうしようもないだろ。戻るわけにもいかないし、そもそも戻れないんだし。

「わかってるよ。どうせ戻れないんだから諦めろって言うんでしょ。そんなのはわかってるんだよ。わかってるから、悔しいんでしょうが。その辺をわかって欲しいんだよ」

「俺だって悔しいんだって。そもそも、俺はその前も寝込んで、屋台に行っていないんだぞ」

「そういえばそうだったね。トールちゃんは、私よりも制覇には遠かったんだ」

にやにやされると不気味だ。

「なんだよ」

「ううん、なんでもない。ただの優越感」

「そうですか」

ドヤ顔をされると、かなりムカツくな。

「とにかく、あの小屋まで行ってみるか」

「引き返すわけにはいかないもんね」

「そうだな」

俺たちには、前に進むしか選択肢はない。

蜘蛛(アラネーオ)が連れてきてくれたこの世界のこの場所には、必ず蟲(ベステート)がいる。その蟲(ベステート)を封印しないと。

小屋の先には、草が生い茂っていてわかりづらいが、またしても門があった。さすがに、以前の世界のものよりは小さい。さすがにあの大きさはなかなかないだろう。

「これって、やっぱりそうだよな」

「だろうな」

なんとも、フラッシュバック……じゃないや、デジャヴってやつか？

「でもさ、国に入るには、そういう審査所みたいなのがあっても不思議じゃないよな」

「そうだよな。私たちの世界だって、入管があるもんね」

「そうだな」

パスポートが必要ないってだけいいかもな。

もし必要な国があったらどうするんだ？ いまさらだけど、そういう場合って入国できないよな。

パスポートを持ってきていないって事もあるけど、あったところで世界が違うんだからな。

そんな事を気にする事が変なのか。

「なんだか、緊張するね」

「そうだな」

以前の事がどうというよりも、こういう場所ってどうしても緊張するもんだろ。

その小屋の近くには、看板が立っている。

「ここより先はいかなる国家にも属さない独立地帯である、

そんな事が書かれている。

「独立地帯……？」

「なんだか、すごいここに来ちゃったのかな」

看板を見ると、途端に不安になってくる。

なんとも不穏な雰囲気だ。

できるなら、引き返したいくらいだ。

「震えてるよ、トールちゃん」

「そ、そんな事ないだろ」

自分じゃわからないけど、そうなのか？

「うん、震えてないね」

さらっとそんな事を言われる。

「はあ？ どういう事だよ」

「いやあ、そう言ったら、トールちゃんが引っかかるかと思って」

「意味わからない事するなよな」

「でも、和んだでしょ」

「……………まあな」

確かに気分は楽になったかもしれないけど、なんだかスッキリしないな。

「じゃあ、和んだところで、小屋に行ってみようか」

「………そうだな」

それでも、なんとなく緊張はしている。

「入るぞ」

「うん」

なんだかんだ言いつつ、キヨカだって緊張してるじゃないか。まあ、それを誤魔化すために、あんな事をしてたんだろうけど。

「とっとと入って来んか」

中に入ると、嘎れた声が聞こえる。

ドアを開けただけで、ここまで急かされるのか。

そう思って声の方を見ると、そこには禿頭の老人がいた。なにかの作業をしているようだ。

「ほれ、早う入って来んかい」

そう言われ、俺たちは中に入っていく。

「.....すごい」

「.....すごいね」

中に入ると、俺たちはその光景に言葉を失った。

決して大きくない小屋の壁一面に、様々な仮面が飾られている。いや、壁一面じゃないな。天井にまで飾られている。まさに、仮面に囲まれている。

それらの視線が、俺たちに集中して、少し不気味だったりする。正直なところ怖い。

「勝手に入ろうとせんかったのは、褒めてやろう」

そんな言葉を掛けられるが、禿頭の老人はこっちを見ていないので、褒められているようには思えない。

「さあ、さっさと選べ」

ぶっきらぼうに、それだけを言われても、なにを選べばいいのかわからない。

「トールちゃん.....」

キヨカが不安そうに見てくる。

「あの.....なにを選べば.....」

「仮面に決まっとうが。もしやお前ら、なんも知らんと来たのか」

訊くというよりは、完全に莫迦にした言い方だった。

「こちとら暇じゃないんでな。さっさと仮面を選んでくれんか。それと、名前も決めてくれや」

それだけ言うと、再び作業を始める。

「仮面って、この中から選ぶのかな？」

「だろうな」

それにしても、とんでもない量の仮面だ。

そんなに大きくないものの、部屋の中いっぱいにある。全部で、いくつくらいあるんだろうな

。

さらにすごいのは、同じものはないという事だ。

似ているものはあるものの、やはりどこかが違う。

「ねえ、これって綺麗だね.....」

「どれだ？」

キヨカが指している仮面は、特徴の少ない平坦な雰囲気だが、その表情は左右非対称なのが特徴だろうか。不気味さと奇妙さが同居している感じだ。

それに加えて、その色が印象的だ。

「すごいな、その青」

吸い込まれるような、それでいて力強さを感じられるような青だ。吸い込まれてしまいそうになる。

そんな青にアクセントとして、白い飛沫のようなものが散っている。まるで波飛沫のようだ。

奇妙さの中に、海をそのまま閉じこめた――そんな仮面だった。

「嬢ちゃんは、それにするのかい？」

「ううん、私には……」

老人の言葉に首を振る。

「なんだか、仮面に全部を奪われそうな感じがするもん」

俺も同じ感覚だった。

とても綺麗で魅力的だ。しかし、その力が強すぎる。俺やキヨカだと、完全に持て余しそうだ。

たかが仮面だろうと思われようが、どうせ自分は見えないんだとわかっていようが、その力強さに圧倒されるという事に変わりはない。

「この中から選ぶのって、かなり大変だよな」

「そうだね。どれも素敵だよね」

もちろんそれもそうなのだが、さっきの青い仮面だけでなく、どの仮面も圧倒的な存在感を放っている。

見ているだけで、押しつぶされそうな力を感じる。

「決まったら声を掛けとくれ」

それだけ言うと、老人は黙々と作業を続ける。

俺たちが悩んでいる間にも、新しい仮面が作られていっている。

いったい、どれだけ仮面を作ってるんだろう？

それはわからないような気がする。老人が数えながら作っているとも思えない。おおよそだっ  
てわからないだろう。

この部屋の中にある仮面も、数えるのがイヤになるほどだ。

一〇〇なんて、簡単に超えてしまっている。

「迷っちゃって決められないよ……」

キヨカはひとつひとつをじっくりと見ながら選んでいる。

なにかしらビビッときたものを選ぶにも、どれもこれも魅力的すぎて、全てにそういう気持ち  
になってしまう。

結局、一通りの仮面を見ていると、かなり時間が経っていたようだ。

「お前さんら、まだ決まらんのか。そろそろ、二時間は経つとるぞ」

老人がぼやいて初めて、俺たちはその事実を知った。

「嘘っ」

「マジで？」

俺たちは同時に驚きの声を上げる。

まさかそんなに経っているとは思っていなかった。

まだ数十分くらいかと……。

「まだじゃったら、ゆっくり決めろ。もし気に入ったものがなければ、作ってやらんでもない。ただし、出来上がるまでの間、この外で生活してもらうがな」

「どれもよくって、迷っちゃってます」

キヨカが笑顔で答える。

「そうか」

老人は、嬉しそうに呟く。

「少し奥で休んどるでな」

そう言い残して、奥にあった部屋に入っていった。

そうすると、残されたのは俺たちと仮面だけだ。

「トールちゃん、どうしよう……」

「どうするもなにも、選ぶしかないだろ」

どうして選ぶ必要があるのかわからないけど、そうするように言われたわけだし、選ぶしかないんだ。

それがこの国の決まりなんだとしたら、入国するためにも選ばないといけない。

「トールちゃんは、どれが私に似合うと思う？」

「はあ？ そんなの、自分で決めろよ」

「だって、決められないんだもん。だったら、トールちゃんが選んでくれたものもいいじゃない」

「……………じゃあ、これでいいんじゃないか」

適当に近くにあった仮面を渡す。

ピンク色をした狐のような仮面だった。

どこか野生的な凶暴さがありつつ、愛らしさも兼ね備えている。

適当に選んだにしては、キヨカのイメージに合っているかもしれない。

「これか……。確かに可愛いんだけど、ちょっと怖くない？」

「そうか？ 俺は似合うと思うけどな」

「適当に選んだくせに？」

その言葉に、ぎゅっと体が縮む。

「そんな事ないぞ。キヨカらしい仮面で、いいと思ったんだけどな……」

適当な部分がなかったとは言い難いけど、ちゃんと考えて選んだ。近くにあった……ってのもあるか。

でも、キヨカに似合うと思ったのは本当だ。

「本当かな……。でも、トールちゃんがそう言うなら……」

キヨカはその仮面をしげしげと見る。

「もうちょっと愛らしい方が、私らしいかな……。でも、トールちゃんが選んでくれたしな……」

なにか呟きながら、仮面とにらめっこしているのを見るのは面白い。

っと、そんなのを見ている場合じゃなかったな。俺も仮面を決めないと。

この中からってのが難しいよな。なかなか選べないぞ。

「トールちゃんは、これがいいんじゃないの？」

俺が迷っていると、キヨカがひとつの仮面を持ってきた。

「これか……」

それは、緑色を基本としていて、鳥のような表情をしている。

狐と鳥ね……。

「じゃあ、俺はキヨカが選んでくれたこれにするか」

「ホントに？」

俺の言葉にキヨカが妙に喜ぶ。

「ようやくと、決まったか」

「はい、なんとか」

「お互いに選ぶなんて、いい感じだね」

キヨカはにやにやしている。

「仮面が決まったなら、名前も決めとくれ」

名前？

そういえば、そういう事を言ってたっけ。

「名前って……このままでいいよね」

「お前ら、本名はやめておけ。偽名にしろ」

俺も本名を……と思ったところに、そう言われた。

「偽名か……。芸名みたいなものかな」

「そうだな。ハンドルネームとか、ペンネームみたいなものか？」

今まで、そういう経験がないのでよくわからない。

「できるだけ簡単なものがいいぞ。あの国の中でいる時は、その名前だからな」

「どういう事ですか？」

「しょうがない。少しだけ説明しておいてやろう。そうでもしないと、お前らは決めそうにないからな」

愚痴りながらも、説明してくれるらしい。ありがたい。

「あの国の中では、仮面を外す事はできん。そして、本名を名乗る事もできん。そんな事をすれば、即刻国を出ねばならん」

「顔と名前を……」

素顔を隠し、名前を隠して生活するのか。

「自分から言うのはもちろんじゃが、相手の素性を探ってもいかん。それが決まりじゃ」

「すごい国だね」

「それって、最近からなんですか？」

「いや、ずっと昔からじゃ」

「そうですか……」

奇妙な決まりなので、蟲(ベステート)の影響かと思ったけど、どうやらそうじゃないらしい。元々、こういう決まりがあったっぽい。

「ねえ、名前どうする？」

「どうするったってな……」

どんな名前がいいんだろうな。

「他の人がどんな名前を付けたか、教えてもらえませんか？」

思いつかないから、なにかを参考にしないと。

そう思って老人に訊く。

「それは無理じゃな」

と、一蹴された。

「どうしてですか」

「誰も記憶しとらんからな。それに、その者の素性に触れる可能性がある。そういったものを、他の者が見聞する事はできんな」

「でも……どういった名前がいいとか……」

「好きなものにすればいい。ただし、同じ名前は使用できんからな。その場合は、考え直してもらおうぞ」

「……………」

どうにも取り付く島もないようだ。

「どうしよう、トールちゃん」

「名前だよな……」

本名じゃなくて、偽名にしろって事だけど、誰か知り合いの名前ってのも気が引けるよな……

。「やっぱり、なにかハンドルネームっぽい方がいいんじゃないか？」

「そうだよな……。日本名とかだと、国が特定されちゃったりするよね」

「そうだな。名前の響きでわかるかもしれないしな」

「だったら、無難なものの方がいいんだよね」

俺たちは相談するものの、どういう名前がいいのかサッパリだ。

「やっぱり、外国人っぽい方がいいよね」

「そうだな……。できれば、短い方がいいだろうし」

「その方が呼びやすいよね」

「そうだな。……………すみません、お訊きしたいんですけど」

「なんじゃ」

声を掛けると、怪訝な声が返ってきた。思わず体がびくんとなる。

「名前って、ファーストネームと、ファミリーネームがあった方がいいんですか？」

「好きにすればいい。ほとんどは、ファーストネームのみじゃがな。ファミリーネームは、おすすめできんぞ」

「どうしてですか？」

理由がわからず訊き返す。

「関係者だとわかりやすいという事が一点。そこから素性がバレやすいという事が一点。もし退国処分になった場合、一緒に追い出されるという事が一点。まあ、余計な事はせん事だな。必要なぞありやせん」

つまり、ファーストネームだけでいいって事か。

それだけの理由なら、俺たちの場合あまり関係ないかもしれないな。

「そっか……名字はいらないんだ。せっかく、トールちゃんと夫婦にしようと思ったのに」

キヨカがなにかを言っているが、聞かなかった事にしておこう。

「じゃあ、なにか愛称みたいなのもいいかもな」

「そうだね」

なにか簡単な言葉で、呼びやすいものにしようと思え、それぞれ考える。

「俺は決めたぞ」

「えっ？ どうしよう。私、まだだよ」

「決まったなら、ここに入力してくれんかの」

そう言って老人が持ってきたものは、この場にはとても相応しくないものだった。

「パソコン……？」

「パソコン……だね」

それはどう見てもパソコンだった。

モニターにキーボード。俺たちが知っているデザインとは多少違うものの、まさかこんな場所でパソコンを見る事になるとは思わなかった。

もしかして、この世界って俺たちが思っているよりも、文明が発達してるのか？

「どうかしたのか？ もしかして、コンピューター口を見るのは初めてか？」

これって、そういう名前なんだ。

「いえ、俺たちの世界にも似たようなものがある、まさかここで見る事になるとは思わなかったもので……」

「そうか。じゃあ、使い方はわかる。名前を入力してくれ」

「はい」

キーボードの並びや、文字が違うものの、一応解読できる文字だったので入力する事はできた。

「PHI、

「調べてみようかの」

入力すると、老人がなにやら操作をする。

「大丈夫じゃ。誰も使っておらん」

どうやら過去の名前を検索していたらしい。

って事は、全員のデータがあるのか。

同じ名前の人はいない……。

どれだけバリエーションがあるんだ？

「トールちゃん、そういう名前にしたんだ。じゃあ、私は……」

キヨカも名前を入力する。

「THE TA、

老人がそれも検索する。

「大丈夫じゃな」

「やった」

キヨカが小さくガッツポーズをする。

なにか強い気持ちがあったらしい。どういう意味があるんだ？

「名前が決まったな。ほれ、仮面を貸せ」

手を差し出されたので、俺たちは言われるままに、選んだ仮面を渡す。

なにをするんだろう？

その答えはすぐにわかった。

老人は、俺たちが選んだ仮面に、俺たちが決めた名前を彫っている。

彫られる瞬間、思わずあっと声が出てしまった。

それはすぐに終わった。

仮面の左頬の部分に、それぞれの名前が彫られた。

「これで、お前たちは今から、ファイとシータじゃ」

渡された仮面をじっと見る。

「あの国では、その名前を名乗る事。仮面を決して外さない事。本当の自分を知られないように気を付けよ」

「はい、わかりました」

「はい。ありがとうございます」

俺たちは仮面を着けてみる。

「そうじゃった。わしの名前はガギ・デジバという。あの国へ入ろうとする者のために仮面を作っておるだけじゃ。国の事は、中に入れば案内する者がおる。……あの国を楽しんで来てくれ」

ガギ・デジバさんはそう言うと、俺たちを外に出そうとするので、半ば追い出されるように小屋を出た。

背の高い草の中を歩いていくと、国の入り口が見えてきた。

「あれか……」

そこには門があった。

「いよいよだね」

自然と緊張してくる。

心の準備をしていると、ゆっくりと門が開いていく。

そこには誰かが立っている。仮面のせいで性別はわかりづらいが、おそらくは女の人だろう。体型というか、出で立ちがそういう感じだ。

その人は、赤がベースで両側に羽のような意匠が施されている仮面を被っている。その表情は鳥のような獣のような……なんとも不思議だった。

「ようこそいらっしゃいました」

そう言って、ぺこりとお辞儀で出迎えられた。声を聞いてはっきりしたが、やっぱり女の人だったようだ。

「えっと……」

キヨカは、おどおどとしている。

俺もどうしていいのかわからず、とりあえずぺこりとお辞儀を返す。

「それではこちらへどうぞ。ファイ様、シータ様」

女の方は、誰かを案内しようとしている。

「……って、私たちだよね」

「そうだった」

呼ばれ慣れない名前だったので、俺たちだと気付けなかった。

俺たちに向かってお辞儀をしてたんだから、俺たちの事に決まってるだろうに。

やっぱり、名前が違うと難しいものなんだな。

「トー……ファイ、行こうか」

「そうだな」

キヨカのヤツ、うっかり名前を言いそうになったな。まあ、俺だって人の事は言えそうにない。極力、名前を呼ばないようにしたいものだ。

まあ、それだと慣れないだろうけど。

そういや、前にもこんな風に違う名前ってのがあったな。あんまりいい思い出はないけど。

そんな事を考えながら、俺たちは赤い仮面の人についていく。

「そういえば、どうして私たちの名前がわかったんだろうね」

歩きながらキヨカが訊いてきた。

「そりゃ、やっぱりあの小屋から……じゃないのか？」

あれがパソコンなら、データが送信されていてもおかしくない。

「そっか……」

キヨカが俺の説明で納得していたら、仮面の女の人が正解を言ってくれた。

「お名前は、仮面を見ればわかりますよ」

おそらく、仮面の向こうでは笑っているのだろう。くすくすという声も聞こえる。

「仮面……？ あっ」

キヨカが俺の方を見て納得する。俺も同時にキヨカの仮面を見てわかった。

そういえば、仮面には俺たちの名前が彫られているんだった。だから、仮面を見れば、その人の名前がわかる。

なるほどな。

謎が解けると、非常に莫迦らしい。

そういや、名前を彫ってたよな。不思議に思った自分が恥ずかしい。

「どうぞ、こちらへ」

案内してくれる女の人の名前を見ようとしたが、後をついていっているので仮面が見えない。

後でいっか。

案内された場所は、まさしく案内所のような場所だった。総合的にそういった事を行っているのだろう。しかし、俺たち以外は誰もいない。

「それでは、改めまして、よろしく申し上げます。私はミーアと申します」

仮面には `M E E R、と彫られている。

「まずは、この国について説明させていただきます。ガギ様から、少しは説明されているかと思いますが、改めて確認を含めてさせていただきます」

俺たちの方をじっと見ているようだが、仮面で視線がわからないのが不気味だ。

「最初に、この国では、お互いの素性を詮索する事は禁じられています。この国に来た目的はもちろん、本名や経歴などを訊いたり調べてはいけません。自ら教える事も禁じられています。今までの自分を忘れ、捨て去って、新しい人生を過ごすのがこの国です」

あの小屋でも聞いたけど、改めて説明されると、なかなか厳しそうだな。

目的を教える事もできないって事は、蟲(ベステート)の情報を集めるのは難しそうだ。それを訊く事が、俺たちの目的を説明してるようなものだしな。

自分たちだけで探すか、向こうから現れてくるのを待つしかなさそうだ。

「当然ですが、本名を名乗る事も禁じられています。ここでのあなた方のお名前は、ファイ様とシータ様です。もちろん、私はあなた方の本名は知りませんし、素性も知りません。もとより、興味がないわけですが」

なんだか、最後は身も蓋もない感じだな。

「もし、知られたらどうなるんですか？」

キヨカが訊く。

「その場合は、すぐに退国していただきます」

即答だった。

「これは任意ではなく強制です。自分は知られても構わないと思われても、知られればこの国に

居続ける事はできません。理由の如何を問わず退国処分となります。また、退国した者は、二度とこの国に、入る事はできません。これに例外はありません」

なかなか厳しそうだ。

「こりゃ、気を付けないといけないな」

「そうだね。誰かに訊けないよね」

ミーアさんに聞こえない程度に話す。

ここで、迂闊(うかつ)に話すと、いきなり退国処分になりかねない。

「まあ、名前はなんとか気を付けないとね。でも、あの経験があるから大丈夫だよな」

「まあ.....なんとか頑張るしかないな」

思い出したくないっての。

「ちなみに、外部との接触もできません。今までの生活や、人との関係はなかったものとして下さい」

俺たちの場合、他に連絡をする相手がいるわけじゃないから、これに関しては特に問題なさそうだな。

「その代わりというわけではないのですが、滞在期間に制限はありません。いつまででも可能です。もちろん、永住も問題ありません。仕事に関しても求人がありますし、もちろん自ら起業しても構いません。一応、届けだけはしていただく必要がありますが」

「それって、やっぱり税金とか.....？」

「そうですね。そういう事がないとは言いませんが、税金に関しては、ほぼないと思っていただいて構わないかと思います。それに関しては、起業される時に説明いたします」

「わかりました」

まあ、商売をするつもりはないけど。

「これでだいたいの説明は終わりです。細かな疑問は、生活の中であるかもしれません。その際は、ここへ来ていただければ説明させていただきます。各種の手続きも、こちらで行えます」

どうやら、ここはただの案内所というだけでなく、役所のような役割もあるみたいだな。

「最後になりましたが、この国では独自の通貨を発行しています。両替もこちらで行えます。早速、両替をされますか？ もっとも、そうでないと、この国での生活はできませんが」

確かにそうだな。

だけどこの財布なら、この国の通貨で出てくるんじゃないだろうか。

財布を確認すると、単位は`謳華(おうか)`となっている。

「トー.....違った、ファイ、どうする？」

「そうだな.....」

キヨカも確認したらしい。

「ちなみに、一 s t e l o が二五謳華です。ちなみに、謳華というのがこの国の通貨単位です」

「なるほど.....」

だとすると、やっぱりこの財布はすごいな。この国の通貨にちゃんとなっている。

「シータ、とりあえず一〇〇 s t e l o くらいでいいか？」

全く両替しないのは不自然だもんな。

「そうだね」

この国の物価がわからないけど、これでなにもできないという事はないだろう。

「わかりました。それでは、両替をいたします」

ミーアさんに一〇〇 s t e l o を渡すと、彼女は建物内の機械にそれを入れた。どうやら、それが両替機らしい。

すると、三枚の紙幣が出てきた。

「これがこの国の通貨、謳華です。一〇〇〇謳華札が二枚と五〇〇謳華札が一枚です。確認して下さい」

渡された謳華札を確認する。まあ、この枚数だし、見ればだいたいわかる。

「確かに」

「先程も言いましたが、この国だけの通貨ですので、当然ですが他では使用できません。両替は、国内にいくつかある案内所で行う事ができます」

「わかりました」

もっとも、俺たちの場合は、その必要はなさそうだ。財布から出せば、そのまま謳華となっている。

試しに、財布から少し出してみると……。

うん、確かに謳華札だ。手元にあるものと比べても、違いはない。偽札じゃないんだけど、変な感じだな。

「最後に、こちらはこの国の情報誌です。宿はもちろん、賃貸もしくは分譲している物件、飲食店やその他のお店、求人などの情報も記載されています。国内の地図も載っていますので、ご確認下さい。わからない事も、これで解決する場合はほとんどです。もちろん、案内所でもご説明させていただきます」

「わかりました。……とりあえず訊きたいのですが、この国の代表は誰なんですか？」

「代表……ですか？」

「はい。国王とか大統領とか……そういう人は？」

「いません。この国では、全ての人が国内の事を運営しています。決まりを守る事が重要であり、政治は必要とされていません。それぞれが、自分の責任で生活を営む事が重要なのです」

「なにか問題があったら、どうなるんですか？」

「問題……ですか。ほとんどの場合は、私たちのような案内人がその役目を担います。ちなみに、今までそのような事態はありません。外との接触がありませんので、ここで生活するだけの利益があれば問題ないわけですから」

「そうですか……」

まあ、俺は経済学を専攻しているわけじゃないけど、金利とかお金関係の制御は誰かがしているはずだ。

金融関係がなければ、貨幣社会は成立しない。そのためには、国家なりそれに相当する組織が必要はず。でないと、インフレやデフレなど、なにかしらの問題が生じてくる。

それなのに、それらしい組織はなさそうだ。

この国って、かなりの奇跡の上に成立しているのか？ それとも、誰かがこっそりと制御しているのだろうか。

裏で国を牛耳(ぎゅうじ)っている人物……か。

もしかしたら、この人たちや他の人たちも知らないだけで、そういう組織があるんだろうな。

「それでは、この国で幸せな生活が送れますように」

最後にそんな祈りをしてくれた。

「「ありがとうございました」」

俺たちはお礼を言って、案内所を後にした。

宿屋が並ぶ地区に来ると、あまりそれらしい建物はなかった。

「どうなってるんだ？」

場所を間違えたかと思ったが、どうやらそうじゃないらしい。

「ここって、ホテルっていうよりも、マンションみたいな感じだよね」

「ああ」

マンションというか、アパートというか……そういう集合住宅が並んでいる。そういう宿がないわけじゃないけど、それにしたって……。

「あら、新しくこの国に来た人？」

仮面のせいでよくわからないが、ほどほどの年齢の女性らしい人が話し掛けてきた。真っ赤な猫のような仮面を着けている。

「はい、私たち、さっき来たばかりで……」

「やっぱり。宿を探してるんでしょ？」

もしかして客引きなのか？ そう思ったけど、違ったらしい。

「ずっと昔は宿があったらしいんだけど、今はないの。そもそも、短期滞在の人なんて、まずいないからね。短期でも、賃貸で部屋を借りる事になっているの。もちろん、分譲されている物件もあるわよ。ほら、あそこの案内所に行ってみなさい」

どうやら、迷っている新人を案内してくれただけのようだ。

「ありがとうございます」

「助かりました」

俺たちはお礼を言って、その人と別れる。

「部屋を借りるんだね」

「そうみたいだな」

まあ、それが一番なんだろうな。どうも、俺たちみたいな旅人が来るなんて事はなさそうだし、第一、入国の条件が、単なる旅人にはハードルが高い気がする。そもそも観光をするような場所でもないみたいだから、そういう施設は必要ないんだろう。だったら、この情報誌にもそう書けての……と思ってもう一度見ると、きちんと書かれていた。

宿場街は名称のみで、実際は住居街らしい。

なんだか、この国は相当疲れそうだ。

教えてもらった案内所に着くと、奥の方にカウンターがあり、そこには青い仮面の人が出た。狐のような目の細い仮面を着けている。

どうも表情が見えないってのは不安だな。

なんだか怖い。

動物の顔でもいいから、表情がわかる方がどれだけいいか。

だけど、この世界じゃ仮面を外す事ができないんだよな……。

「部屋をお探しですか？」

どうやら男の人らしい。つうか、性別さえ仮面のせいでわからないんだよな。

とにかくその人の前に行き、カウンター越しに向かい合うように座る。

「あの……俺たち、しばらく滞在する予定なんですけど……」

旅の説明は、俺たちの素性の説明になりそうだし、どう言えばいいのかわからず、しどろもどろになってしまう。

「短期の滞在予定ですね。でしたら、分譲ではなく賃貸の方がよろしいですね」

そう言いつつ、その人はなにかしらの資料を出してくる。

「……はい」

「短期賃貸と、長期賃貸がございますが、どのくらい滞在される予定ですか？」

思わず顔を見合わせる。

「えっと……」

「ファイ、任せたよ。お部屋は私が選ぶけど」

「おい、シータ……」

なんてこった。交渉はやっぱ俺かよ。

「えっと……ちょっと未定なんです」

「そうですか。それでしたら、とりあえず短期賃貸をご案内させていただきますでしょうか」

「ちなみに、長期ってどのくらいなんですか？」

あまり関係ないとは思うけど、一応確認だけしておこう。

「長期となりますと、物件によって異なってきますが、おおよそは三ヶ月からとなっております。短期でしたら、一日からの物件もわずかながらがございます。もちろん、更新していただければ、引き続き利用する事も可能です。ただ、物件によって、諸条件が異なります」

「そうですか……」

なんだか、こういう話って、新居探しをしているみたいだよな。まあ、そういう状況なんだろうけどさ。

大学に通うために部屋を借りた時は、学校の紹介ってのがあったから、そんなに説明って聞いてないんだよな。もちろん、こういう交渉みたいなのもなかった。

「なんだか、私たちの新居探しのシミュレーションみたいだね。愛の巣だよ」

キヨカがやたらとご機嫌だ。つうか、なに考えてるんだよ。新居とか愛の巣って、俺たちは新婚夫婦かっての。

……………はあ。

確かに、そういう風に考えられなくもないのか。面倒だな。

「ただ、一日毎の物件ですと、料金も若干割高ですし、毎日更新手続きが必要になりますので、あまりおすすめはできません」

金額の事は無視しても、確かにそれは面倒そう。毎日、そういう作業をしないとイケないのは無理だな。

「おすすめは、一〇日毎更新か、一五日更新あたりでしょうか」

「なるほど……」

そのくらいならいいかも。

今までも、だいたいそのくらいの日数は滞在してたはずだ。今回がどうなるかわからないけど

。

「じゃあ、一〇日更新できる物件をお願いします」

「かしこまりました」

希望を出すと、いくつかの資料を見せてくれる。

「どこか、ご希望の地区はございますか？」

「地区……？」

男の人は、この国の地図を指している。おそらく、いくつかある集落のどこがいいかって事なんだらう。

「そうだな……。どこがいい？」

一応、キヨカの希望も訊いておかないとな。

「私はね……。美味しい食べ物がある場所がいいな」

おいおい。

「それでしたら、今いるここが一番でしょうね。それでしたら……っと、ご予算はどの程度でしょうか」

「えっと……とりあえず、部屋を見せてもらっていいですか？」

「わかりました」

相場がわからないので、予算もなにもあったもんじゃない。

「そうですね、このあたりの物件ですと、一〇日更新あたり一〇〇〇〇謳華からございます。ただ、辺境のため不便である事と、部屋も小さいという事があります。平均的な物件ですと、この三〇〇〇〇謳華クラスになるかと思えます」

「三〇〇〇〇謳華か……」

どのくらい滞在するかわからないけど、そのくらいならいいかな。日割りすれば、三〇〇〇だろ。……って、月にしたら九〇〇〇〇か。俺の今の家賃と……いや、考えるのはよそう。

旅館に宿泊したら、一泊でそんなもんだったりするし。

「そのあたりをお願いします」

「はい。それでは、いくつか物件をご案内します」

そういうわけで、俺たちは青い仮面の人に案内されて、いくつかの部屋を見てまわる事になった。

「本当に新婚さんみたいだね」

「……………」

俺もそんな事を考えてしまった。

なんだかショックだ。

「ほら、行こう」

「ああ」

キヨカが選んだ部屋は、飲食街が近い場所にあった。

ああ、なるほどね。

キヨカらしいな。

「なにか、ファイ。言いたい事があるっぽいけど」

「別に。いいんじゃないか、ここ」

「でしょ」

俺としては、別に文句はない。

部屋には食卓のテーブルとチェア、そして小さなキッチンがある。自炊もできるらしい。

他にも部屋があり、そこにはベッドがある部屋もある。

もうひとつ部屋はあるのだが、そこはクローゼットがあるだけだった。

俺の部屋よりも豪華かもしれないな。そもそも、家具付きってのがいいね。

まあ、賃貸用だから、俺たちみたいに旅人が使う事を想定してるんだろうけど。さすがに、旅人が数日生活するのに、なにもないのは問題だもんな。

「とりあえず、休憩しないか」

「そうだね……。ちょっと疲れたかも」

俺たちはベッドに腰掛ける。

「でも、お腹も空いたよね」

「そうだな」

確かに腹も減っている。

ずっと歩き通しだったし、部屋を決めるだけでも疲れた。

「というわけで、この国のご飯の調査だね」

「……………お前な」

「ご飯は大切だよ。私の手料理が食べたい気持ちもわかるけど、今日はさすがに無理だよ」

「そういや、キッチンがあるんだった。」

「わかったよ」

空腹のまま眠るつもりはない。

「屋台のリベンジ」

まだ根に持っていたのか。でも、あの規模であのクオリティならわかるな。

荷物を部屋に置いて行く。もちろん、貴重品と風伯は持って行くけど。

なにせ、ここにしばらく住むわけだし、荷物をずっと持っていくのもな……。

その辺は、キヨカと相談して今の状態になった。

「どこがいいのかな」

飲食街が近い場所に部屋を借りているので、そこまでは迷う事はない。

しかし……。

「こりゃ、屋台街に負けない感じだな」

道の両脇にずらっと店が並んでいる。もちろん、飲食店ばかりだ。

中にはカフェもあるが、そこにも美味しそうなメニューがあるので、選択肢に入ってくる。

ただ問題なのは、俺たちが知っている世界じゃないので、和食や中華、フレンチやイタリアン、トルコ料理……などといった括りじゃない。

どういう料理なのか想像できないのが問題だった。

なんとなく、あれっぽいとか、それっぽいな……という風に判断するしかない。

「選べないよね」

そろそろ日も沈んできて、どの店からもいい匂いが。そのせいで、ますます腹が減ってくる。

「もう、どこでもいいんじゃないか」

「トー……ファイ、もうちょっと考えてよ」

やっぱり、まだ言い慣れないよな。

「だけど、こりゃ屋台よりも難しいぞ」

屋台だと、ちょっとずつという事もできたが、飲食店でそれは難しいだろ。やっぱり、その店で腹一杯になるだろ。

「そうだよな。店選びが重要だもんね」

「そうなんだよな。……というわけで、キヨ……シータに任せる。お前のインスピレーションで選んでくれ。シータの勘なら、間違いはないだろうし」

「そうかな……。じゃあ、私が選んじゃうよ。後で文句言わないでね」

「わかってるって」

「本当にいいんだね」

「ああ、任せる」

他人任せで責任放棄かもしれないが、キヨカならいい店を引き当てるだろう。

「……そうだな……。どこも、いい感じなんだよね。あとは、今日の気分にあったものだよな」

「そうだな。俺はなんでもいい。シータが食べたいものでいい」

「それって、一番困るんだよね」

「しょうがないだろ。それに、中華が食べたいとか言っても、中華料理の店なんてないだろうし」

「そうだけど……。それでも、それっぽい所を探せるでしょ」

「まあな」

「しょうがないな……。ファイはダメな子だよ」

「……………」

なんだか酷い言われようだけど、実際そうかもしれないな。自分じゃなにも決めずに、全てを任せただけだからな。

よく考えれば、今の店選びだけじゃなくて、その前の部屋選びもそうなのか。そりゃ、キヨカも呆れるよな。

「よし、ここにしよう」

俺がぐじぐじしている間に、キヨカは店を決めたらしい。

「ここでいいよね」

「ああ」

キヨカが決めたのは、通りに入る一番手前の店だった。

「決められない時は、手当たり次第だよな」

「……………そうだな」

キヨカに全部を任せた俺が、なにかを言う事なんてできない。

「それがいいかもしれないな」

決められないなら、順番に入っていくのがいいだろう。それなら迷わない。

今日はここで、次は隣……そういう事でいいだろ。

散々迷った結果がこれだ。結局のところ、これが究極なのかもしれないな。

なあんて、意味もなく達観しておく。

「でしょ。……………まあ、姑息かもしれないけど」

「その場凌ぎのなにかが悪いんだよ。俺はいいと思うぞ」

「ファイならそう言うと思ってたんだけどね。それに甘えたってのはあるかも」

「……………」

そういう言い方をされると、余計になにも言えなくなってくる。

「じゃあ、入ろうか」

「そうだね」

引き戸になっている扉を開けて、中に入ると、大きなテーブルがいくつも並んでいて、両側に椅子が並んでいる。既に客がいて、めいめいに座って食べている。

テーブル毎というわけではなさそうだ。好きな場所に座れという事なんだろう。

注文はどうするのかと思ったが、奥に料理が並んでいて、自分で選ぶようだ。

どうやら、自分で好きなものを選んで、料金を支払うシステムになっているらしい。

「当たりじゃない？」

「好きなものを食べれるからな」

味はまだ未知数だけど、いきなりこういう形式の店を引き当てるとは……。さすがキヨカだな

。

「じゃあ、早速選ぼうか」

「そうだな」

俺たちはトレイに皿を載せて、料理を選んでいく。

「おっ」

意外と並んでいる料理には馴染みがあった。

まさにバイキングといった感じだ。

和食っぽい煮物や、揚げ物、スープ……とにかくデザートに至るまで、色々なものがあった。

俺たちは、それぞれ好きなものを入れて、最後に精算する。

まあ、なにかの唐揚げとか、なんとなくわかるものしかチョイスできないんだが。

ちらりとキヨカのトレイを見ると、よくわからないものをチョイスしている。なかなかのチャレンジだな。だが、それがキヨカのいいところだよな。

料理の料金を見ずに選んでいたの、合計金額がちょっと心配だ。

「ファイ、お金は……」

「まあ、法外な値段じゃなけりゃ大丈夫だろ」

とまあ、心配したものの、二人合わせても二〇〇〇謳華でお釣りが少しある程度だった。

この国の水準がよくわからないから、これが高いのかどうかわからないけど、特別高い……というわけでもなさそうだ。事実、俺の後ろに並んでいた人は、八〇〇謳華だった。

食事を終えて部屋に戻り、シャワーを浴びて眠る事にした。

旅の疲れを癒したい。

「トー……じゃなかった、ファイは、明日どうするか決めてる？」

こうして二人きりになると、つい油断してしまう。俺もキヨカと言いそうになる。

「そりゃ、蟲(ベステート)の搜索だろ」

「そうだけど……」

「どうしたんだ？」

いったい、なにが言いたいんだろう？ 俺たちがする事といたら、蟲(ベステート)を探して封印する事だけだろ。

「ファイさ、風伯使えるよね」

「えっ？」

なに言ってんだ？

「そりゃ、使えるに決まってるだろ。どうしたんだ？」

「ううん、それならいいんだ」

そう言って、キヨカは布団を頭まで被る。

急になんだ？ 俺が風伯を使えるかって……意味がわからない。

「おやすみ」

まあ、考えてもしょうがないし、キヨカだってこれ以上は言わないだろう。

今日はゆっくり休もう。明日から、大変になるかもしれないし。

こうして、ゆっくりと眠るのって久しぶり……ってわけでもないか。

なんだか、寝込む事が続いたから、そう感じるだけだろうな。

翌朝も快晴だった。

朝日で目が覚めるとというのは、やっぱり気持ちいい。眩しいのはきついけど。

この前まで、朝日なんてなかったんだもんな……。

あれだと、起きた気がしない。そもそも時間の感覚がおかしくなってくる。

それに比べると、この世界は普通だな。もっとも、この仮面がなければ……だけど。

今までの世界もそうだったけど、やっぱりこの世界も変だ。蟲(ベステート)の影響なんだよな。

だとすると、俺たちが蟲(ベステート)を封印すると、この仮面制度もなくなっちゃうのかな。

動物に見える世界がそうだったわけだし、きっとそうなんだろう。

「ん〜〜〜っ」

仮面がなけりゃ最高の目覚めだ。

この国の人は、これに不便さを感じてないのか？ 蟲(ベステート)の影響ならしょうがないのかもな。

っていうか、同行者なんだから、キヨカには顔を見せてもいい気がするんだけどな……。でも、万が一ってのはあるよな。そのせいで、退国処分なんて冗談じゃない。

そんな事を考えていると、キヨカがもぞもぞと動く。そろそろお目覚めかな。

「ん？ んぁ……」

仮面があるので表情はわからないけど、きっと間抜けな顔なんだろうな……と、声で想像する

。

「んぁ、トー……」

「シータ」

思わず声を荒げてしまう。

キヨカは、うわっと飛び起きる。

「もう、トー……」

「シータ、黙れ」

これ以上、言わせるわけにはいかない。そんな事をすれば、俺たちは……。

「シータ、俺はファイだぞ。わかってるよな」

「ファ……イ？」

どうやら完全に寝ぼけているらしい。

「しっかりしろよな。迂闊(うかつ)に本名を言って、追い出されるのはイヤだぞ」

「……………本名……？ ………………追い出される……？ ………………って、そうだよ。言っちゃダメなんだ。もう、ファイはしっかりしてよね」

「しっかりするのはお前だ」

俺は最初からしっかりしてたっけの。だけど、さすがに起きたばかりは厳しいな。ついいつもの調子で、キヨカって言いそうになる。

「シータ、今日だけどさ……」

「ファイは、修行した方がいいよ」

「うっ」

昨日寝る前に、キヨカが言い出した事が気になっていた。それで、風伯(ふうはく)で修行でも...  
...と思っていたら、キヨカにそれを言われてしまい、言葉を詰まらせてしまう。

自分で思うのはいいんだけど、それを誰かに言われるのはいい気がしない。

「そのつもりだったけどさ、急にどうしたんだよ」

「今までも修行はしてたよね。それはすごいと思うんだ。でもね、蟲(ベステート)は強くなっている気がするの。それで.....ゴーウォンさんたち、自警団みたいになって欲しくないから.....」

「.....」

なるほどな。キヨカが言いたい事はわかった。

あの時、ゴーウォンさんたち自警団もそうだが、俺も完全に敗北を喫した。勝利したのはキヨカだ。俺は倒れていただけ。

それを考えると、俺はもっと強くなれないといけないわけだ。だから、キヨカが言っているのはもっともなんだ。

「もう、あんな光景を見るのはイヤだよ」

その言葉で、自警団の惨劇を思い出す。俺だって、あんな風にはなりたくない。それは誰もがそうだろう。

「わかったよ。元々そういうつもりだったからな」

「うん。.....じゃあ、朝ご飯だね」

一気に変わったな。少し重い空気だったのが、一気に弛んだよ。

「そうだな。朝ご飯は重要だよな」

「そうだよ。なにをするにも、ちゃんと朝御飯を食べないとね」

そういうわけで、俺たちは出掛ける準備をすると、昨日と同じく飲食街に向かう。

ってというか、朝から営業してるんだろうか。夜だけって可能性もあるよな。

そんな不安もありつつ、とりあえず向かう事にする。

懸念だったようで、きちんと営業している。この飲食街は、この国の食を担っているようだ。

「今日はここだね」

「そうだな」

昨日入った店の隣の店に入る。

どんな料理の店なのかわからないけど、とにかくいい匂いがしてくる。

「いらっしゃい」

威勢のいい声に迎えられる。

店内には、数人の客が食事をしている。その誰もが麺料理を食べている。どうやら、ここは麺料理の店のようだ。

「お好きな所に座って下さい」

いくつかテーブルがあるうちの、一番出入り口に近い場所に陣取る。

「注文が決まりましたら呼んで下さい」

「わかりました」

さして広くない店内なので、声が届かないという事はないだろう。

「ファイ、なににする？」

「そうだな……」

メニューは、壁に紙に書いたものが貼られている。同じものの縮小版が、テーブルにもあった

。メニューの数は二〇ほどだろうか。しかし……、

「どういう料理かわからんな」

「……そうだね」

写真があるならともかく、名前だけではどういう料理かわからない。

「ファイはどれにする？」

「シータは決めたのか？」

「……………」

「……………」

俺たちは、牽制(けんせい)するようにメニューとにらめっこ。

このままだと、食べれないという事態も。こうなったら、最終手段しかないか。

「すみません」

とりあえず店員を呼ぶ。

「ファイ、まだ決まってないよ」

「俺もだ」

「えっ？」

キヨカが驚いている間に、店員さんがやってきた。

「ご注文は？」

「えっと……俺たち、この国に昨日来たばかりでして、この辺の料理なんかも詳しくなくてです  
すね……」

店員さんは、それがどうしたという顔で聞いている。

「この店のおすすめとか、人気があるものってどれですか？」

「ああ、そうですね……それでしたら……………」

店員さんは、メニュー表を指しながら教えてくれた。

「じゃあ、それとそれで。シータはそれでいいか？」

「あ、う、うん。それでいいよ」

「それでは、少々お待ち下さい」

店員さんは厨房に向かった。

「ふう～」

注文するだけで緊張する。

この調子だと、毎食このパターンになりそうだな。でも、本当にわからないんだもんな。文字

は読めても、聞いた事もない料理名なんだぞ、わかるわけないだろ。

なんとかの炒め物とかでも、元の食材がわからない場合もある。

「ファイ、すごいね」

「まあ、これが一番無難だろ。人気メニューだったら、変なものはないだろうし」

「そうだね。私たちの味覚に合うかどうかはあるけどね」

「それはどうしようもないな」

味付けに関しては、どうしようもないものがある。でも、他の人たちが食べているのを見ていても、突飛な感じはない。少なくとも激辛という感じではなさそうだ。

「どんな料理だろうね」

「そうだな……楽しみだ」

おすすめと人気メニューをそれぞれひとつずつ。両方運ばれてきたところで、どっちをどっちが食べるか決める事になっている。

そうこうしていると、料理が運ばれてきた。

「お待たせしました」

そう言って、俺たちの前に丼を二つ置いた。一緒に、水が入ったグラスも。

「それではごゆっくり」

店員さんが戻ってから、丼の中を確認する。

「「……………」」

俺たちは言葉を失った。

「ねえ、これって……」

「ああ」

俺たちの目の前にあるのは、どう見てもラーメンだった。

色からするに、醤油と豚骨だろうか。

どっちがおすすめで、どっちが一番人気なのかはよくわからない。ただ、どう見てもラーメンだ。

よく考えれば、他の客が食べているのも、ラーメンっぽいものだった。

「ファイはどっちにする？」

「俺はどっちでもいいや。シータが食べたい方を食べればいいよ」

「そうだな……。ちょっと味見していい？」

「あ、ああ」

そう言うと、キヨカは丼を持ってスープを飲む。両方の味を比べているようだ。

「……どうだ？」

味が気になって思わず訊いてしまう。

「……普通だね」

「……………えっ？」

普通？ 普通って……。

「私、どっちでもいいや」

「シータ？」

「だって、これ、味も普通に醤油と豚骨だよ。しかも、かなりベーシックなヤツ」  
なるほど。どうやら、特別美味しいというわけでもないらしい。

「トッピングも、別に似たようなものだし……。ファイが食べたい方を食べなよ」

「シータが……」

「譲り合っていると、麺がのびちゃうよ」

「そうだな。じゃあ、俺は醤油で」

「うん、じゃあ私は豚骨ね」

豚骨の丼が俺の前に置かれる。

キヨカに味の感想を聞いているからというのもあるんだろうけど、どう見ても豚骨ラーメンだ。トッピングは、ネギのようなものとチャーシューのようなもの。あとは……キクラゲっぽいものなのか、この黒いのは？

まあ、味がわからないというのはあるけど、食べれないものじゃないだろう。人気商品もしくはおすすめ商品なので、そこそこなんだろう。

「じゃあ、私は醤油ね」

キヨカが食べている醤油も、トッピングはネギらしいものと、チャーシューのようなものが入っている。

どうも違いは、スープだけじゃないだろうか。

「いただきます」

キヨカは手を合わせてから、箸立てに入っている箸を持って麺を啜(すす)る。

「いただきます」

俺も同じようにラーメンを食べる。

「「……………」」

しばし無言の時間。

別に不味いわけじゃない。だけど、特別美味しいわけでもない。

至極普通の味だ。

インスタントの方が、美味しいものがあるかもしれない。

俺たちは、ひたすら無言で麺を啜る。

美味しすぎて無言になる事もあるけど、今回は明らかに違う。

あまり長い時間を掛けて食べるようなものでもない。

食を楽しむというよりは、ただ腹になにかを詰めているだけの様な気分だった。

そんな朝食を終えて店を出る。

ちなみに代金は、二人合わせてちょうど一〇〇〇謳華(おうか)だった。まあ、そのくらいだろうか。気分的には、それでも高いくらいだ。もしこの倍くらいだったら、完全に発狂してるだろうな。

まあ、そこそお手軽な金額だし、程々の味だし、これはこれでありなのかもしれない。

「ファイ、今回は外れだったね」

「辛辣だな」

「でも、そうでしょ」

「確かにな。日本でこのクオリティのラーメン屋だったら、確実に閉店してるだろうな」

「そうだね。だからといって、私たちが作れるか……は別だよな」

「まあな」

客としてあれこれ言うけども、じゃあ作れるかという別問題だ。そもそも、ラーメン屋がどうやってスープを作っているか知らないし。鶏ガラとか野菜とか色々と煮込んで出汁をとっているんだろうな。

「お昼はどんな料理かな……」

「当たりだといいな」

そんな期待をしながら、俺たちはぶらぶらと歩いていた。地図はあるものの、実際に見て回った方がいいに決まっている。それに、俺たちは蟲(ベステート)を探さないといけない。そのためには、ひたすら歩き回るしかない。

「けど、今はその前に……、」

「あったよ、ここなんていいんじゃない？」

「そうだな」

俺たちは、広場のような場所を探していた。風伯を思い切り振れる場所があってよかった。

さすがに街中で振るわけにはいかないからな。

ここは芝生になっていて、ちょっとしたピクニックにはよさそうな場所だ。

丘のようになっているので、寝転がるのも気持ちよさそうだ。

「いい場所だな……」

「ファイは、風伯の特訓だよ」

「わかってるって」

「でも、気持ちいいね……」

「結局それかよ」

「そうだよ。私はくつろいでるから、ファイは頑張ってるね」

「……はいはい」

なんだろうな、これ。

でも、俺が少しでも役に立てるようにならないとな。それは事実だ。

「じゃあ、やるか」

風伯を抜いて構える。

「ふう～」

呼吸を整えて、風を纏(まと)うイメージをする。

「……あれ？」

風が纏わない。

「どうなってるんだ？」

「ファイ、どうかした？」

芝生に暢気に寝転んでいたキヨカが、顔だけをこっちに向けて話し掛けてくる。

「あ、ああ……」

どうなってるんだ？ 風伯になにかあったのか？

「やっぱり、なにかあったんだね」

「えっ？」

どういう事だ？

「シータ、それってどういう事だよ。やっぱりってなんだ？」

「うん……アーちゃんがね……」

「ああ」

キヨカは、俺が蟲(ベステート)にやられて気を失っている時に、なにかあったのかを説明してくれた。

「そっか……」

確かに平常心でいられるはずがない。

蜘蛛(アラネーオ)が説明してくれた事が事実だとすると、人の死を目の当たりにした事が原因らしい。

今まで、血を見る事はほとんどなかった。ましてや、あんなに大勢が死ぬ場面なんてない。

「それが、風伯を使えない理由？」

「うん。そうみたい。アーちゃんが心配してたのが、現実になったみたいだね」

「そうなのか……」

だけど、風伯を抜く事ができているという事は、風伯は俺を主(あるじ)だと認めてくれているという事だ。だとすると、原因は完全に俺という事になる。

トラウマの克服かよ。そんなのできるのか？

だいたい、そういうのって、どうすればいいって、治療法みたいなものってないだろ。あるとすれば催眠療法くらいか？ でも、それって根本的なものじゃないよな。姑息な手段だ。だから、効果が切れれば再発する事になる。

そんな方法はとれない。根本的に克服しないとな。

だけど、人の死だぞ。どうすりゃいいんだよ。

他の事なら、慣れるためにひたすら繰り返せばいいんだらうけど、事柄が事柄だけにそれはできない。

「ファイ、大丈夫？」

「大丈夫だったって……。正直、どうすればいいのかわからないんだよな」

「だよな……。アーちゃんも、それは難しいみたいだよ」

「そうだろうな」

心の問題だからな。たとえ神様でも難しいだろうな。

「時間が解決するのかな？」

「そうだといいんだけどな。……だけど、その時間もどれだけあるか、だよな」

「……………そうだよね」

俺たちとしては、あまり長い時間を掛けたくない。

だけど、それは全て蟲(ベステート)の都合だ。蟲(ベステート)の封印次第で変わってくる。

つまり、蟲(ベステート)が現れないと俺たちはなにもできない。

だけど今は、蟲(ベステート)が現れても対処できない。

俺が復活———というか、風伯を再び使えるようになるか、認めてもらえるか、それが鍵になるだろう。

今回に限っては、俺次第ってわけだ。

いつ蟲(ベステート)が現れてもいいように、俺は現状をなんとかしないとイケない。

「もし今、蟲(ベステート)が現れたら、私がなんとかするよ」

「シータ？」

「だって、この前だって、私がなんとかできたもん」

「そ、そうだな。だけど……」

俺は実際に見てないんだけど、キヨカが蟲(ベステート)と闘ったらしい。

今回も俺が闘えない場合は、キヨカに任せるしかないだろう。

だけど、キヨカにそんな危険な事をさせるわけにはいかない。男の勝手なエゴだってのはわかってる。男だとか女だとか、そういうのは関係ないんだってわかってる。

それでも、やっぱりキヨカだけに任せる事ができない。

信頼していないわけじゃない。キヨカが手伝ってくれるなら、これほど頼りになる相棒はいない。

「私なら大丈夫だよ。無茶はしないって」

「ああ、わかった。その時は頼む」

「まっかせなさい。だけど、ファイもちゃんとするんだよ」

「当然だろ」

「そうだね。……さて、今からするでしょ？」

「ああ、そうだな」

今すぐにでも始めないとイケない。だけど、なにをすればいいのかわからない。

だけど、できる事をするだけだ。

「とにかく、初心に戻って、ひたすら素振(すぶ)りだな」

「それがいいかもね。無心だよ。無我の境地だよ」

「ああ」

無心になれば、トラウマとかも関係なくなるんだろうな。その境地までが困難なんだよな。

「じゃあ、私はいつものしてるから」

フルートを出し始めている。

「それはいいな」

キヨカの演奏付きで素振りなんて、これほどいいシチュエーションはないだろ。

「でしょ、でしょ」

キヨカは嬉しそうにフルートを組み立てている。

「じゃあ、やりますか」

俺は鞘に入ったままの風伯を構える。キヨカはフルートを構える。

周囲には人はいないみたいだし、そもそも迷惑になるような練習をするつもりはない。

ふう〜と深呼吸をする。それに合わせたように、キヨカが演奏を始める。

あいにく音楽に詳しくないので曲名はわからないけど、キヨカが演奏しているっただけで心地いい。

そんな素晴らしい音を背に、俺は風伯を振る。

ただひたすらに風伯を振り続ける。

傍目には、木刀で素振りをしているようにしか見えないだろう。まあ、そういうものがない世界ならどうなのかわからないけど。

なにも余計な事は考えない。

雑念を捨てる。

.....なんて、それも雑念だ。

トラウマの克服なんかできるとは思えないけど、少なくとも剣術だけでも上達しておかないとな。

風伯の本当の力が使えないとしても、単純に剣術でカバーできればそれでいい。

それだけじゃ無理なのはわかってるけど、最低でもそこだろ。それが最低ラインだ。

風伯を己の一部とする。

こいつは俺の相棒で、俺の一部だ。

だからこそ、俺の心がこんなだから、本当の力を出せずにいる。こいつだって、もっと力を出し切りたいたらう。本当の力で、自分の使命を全うしたいたらう。

俺のような未熟な使い手に、こんなに力を貸してくれているんだ。それだけでも感謝してるんだぜ。

心の中で風伯に語り掛ける。心が通じれば、もしかしたら.....。それをきっかけに、俺のトラウマも克服できるかもしれないしな。

だけど、力の解放を考えずに、今は剣術の向上だ。風伯をうまく操れないと、風伯に申し訳ないからな。

そんな毎日が続いて、そろそろ一週間になる。

飲食街も結構な店を回る事ができた。

当たりの店のあれば、中には外れの店もある。それでも、まだ料理名がわからないので、注文は同じものだ。外れの店でも、もしかしたら他の料理は……と思わなくもないけど、そもそもオススメと人気メニューが外れなんだから、当たりになるのは難しいよな……というのが、俺とキヨカの意見だ。

そして修行の方だが、なかなか進展はない。

そんな数日で見違えるような事を期待していたわけじゃないけど、さすがに焦りが出てくる。

まだ風伯の力を戻せていない。

ここ数日は、何度か風を出そうと試みたものの、なんの反応もなかった。

その度にキヨカは励ましてくれるが、それもなかなかプレッシャーなんだぞ。

幸いなのかどうかのかわからないけど、今のところ蟲(ベステート)が現れた形跡はない。

まさか、俺が復活するのを待っていてくれるはずはない。

とにかく、現れないのなら、今のうちに準備するだけだ。その期間を与えた事を後悔すればいいんだ。

「シータ、いっちょやってみるわ」

「うん」

風を試す事をキヨカに告げる。これをする時は、少し離れてもらわないといけないからな。それに、周囲にだれもいない事を確認。もし誰かが来る時は、キヨカに報せてもらう。

そもそも、素振りと違って刀身を出すわけだから、それを見た誰かに警察のような組織に通報でもされたら、たまったもんじゃない。

「よし、やるぞ」

「大丈夫だよ」

ああ、と頷いて風伯に集中する。

ぎゅっと握り締め、風伯に祈る。

そして、風が纏うのをイメージ。

風伯。お前の力、もう一度貸してくれ。

自分の体を包むような風を感じ、それを風伯に延長させる。

それと同時に、俺の力を風伯に送り込むように念じる。

頼む。

頼むから。

風伯……応えてくれ。

風伯……………。

しばらくそうしていたが、なんの反応もなかった。

「またダメだったか……」

俺の問題なんだよな。

風伯の力がなくなったわけじゃない。風伯に眠っている力は、それを持つ俺が一番感じている

。

確かに風伯の力はそこにある。だけど、俺がそれを引き出せずにいる。

「ドンマイだよ、ファイ」

「……………ああ」

そういうものの、正直なところはショックなんだよ。この状態で落ち込まずにいられるなんてあり得ないだろ。

風伯を鞘に収める。

風伯、絶対にお前を目覚めさせてやるからな。

「じゃあ、今日もお疲れって事で、ご飯にしようよ。元気になるには、それが一番だよな」

「そうだな。なにか旨いものでも食うか」

「うん」

それからさらに三日が経った。

相変わらず進展はない。

「今日も残念だったね。また明日だよ」

「そうだな」

まさか、こんなに手こずるなんて。いや、これが普通なのか。

あっという間に復活—そんなのあるわけないよな。

そういうのはフィクションだけだ。

実際は、足掻いて足掻いて、それでもまだ足掻いて。結果的に、それを得られるかどうかはわからない。そういうものだろ。

「まだまだこれからだよ。ファイなら絶対大丈夫。本当に無理なら、アーちゃんだって……」

「そうだな」

蜘蛛(アラネーオ)は何度か声を掛けてくれている。アドバイスってわけでもないが、心を穏やかにするようにとか、そういう事を言ってくれる。

門番である蜘蛛(アラネーオ)がいるんだ。俺は資格者(ティトーロン)じゃないけど、それでも伝説の四刀がある。この風伯が認めてくれている。だったら、俺が諦めるわけにはいかないだろ。

「また明日だな」

「そうだよ」

さて、今日も飯を食って休むか。

`蟲(ベステート) 発見せり、

穏やかな時間を、その一言が一変させた。

「アーちゃん、どこ？」

キヨカは左手に話し掛ける。

弛んだ気持ちが一気に引き締まる。

俺も風伯を握り締める。

まだだっなのに……。

だけど、今できる事でなんとかするしかない。

「ファイ、行くよ」

そう言うなり、キヨカは走っていく。

「ああ」

俺はそれを追いかける。

どうなるかじゃないんだよな。どうするかなんだよ。

俺たちがしないといけないのは、蟲(ベステート)の封印。それだけだ。

「やってやるよ」

ぐっと前を見据える。

「ファイ、いたよ」

そこは、荒野が広がる場所だった。

そこに蟲(ベステート)がいた。

細長い感じの胴。頭部には触角。後ろ脚と思われるものは長い。

その姿は、どこかバッタのようでもあった。

もともと、普通のバッタとは比べようもない大きさだ。

「よかった……」

住宅街とか繁華街だったら、とんでもない被害があったかもしれない。ここなら人も少ないだろう。

もちろん、蟲(ベステート)がそんな事を考えているはずもない。偶然だとしても、それに感謝しないとな。

「ここなら思う存分戦えるな」

「うん」

キヨカは既に左手の白いオープンフィンガーグローブを脱いでいる。

「アーちゃん、お願いね」

「了解した」

キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

俺も風伯を抜いて構える。

「いけるよな」

風伯に語り掛ける。

特訓では無理だったが、本番だったらどうだろう。

やっぱり気持ちが変わるはずだ。もしかしたら、風伯の力を引き出せるかもしれない。

甘い期待かもしれないが、それに賭けるしかない。

「頑張ってね」

「ああ、任せとけ。蜘蛛(アラネーオ)、俺はまだ風伯の力を使えていない。悪いが、あまりフォローできそうにない」

「心次第、

「そっか。やってやる」

俺たちは、一気に距離を詰める。

向こうは気付いているのか、気付いていないのか、とにかく動かない。

「このまま一気に終わらせよう」

「了解、

俺と蜘蛛(アラネーオ)はこのまま終わらせるつもりで、完全に間合いに入った一瞬間、

「っ！」

蟲(ベステート)は跳躍して、俺たちを飛び越えていく。

その先には……、

「大丈夫だよ」

キヨカはフルートを構えていた。まるで、それがわかっていたかのように、演奏を始める。

キヨカ……。

急反転して、キヨカの元に向かう。

「マジか……」

聞いてはいたものの、今ひとつ信じていなかった事が、目の前で現実となっていた。

跳躍した蟲(ベステート)は、キヨカの演奏が始まると、空中にも関わらず勢いをなくして落下していく。

「どうなって……」

よくわからないが、キヨカの演奏がそうさせてるんだよな。

それはともかく、今は急がないと。とにかくキヨカの元に駆け寄る。

「大丈夫……だな」

「もちろん」

そう答えて、再び演奏を始める。

蟲(ベステート)は演奏の間、苦しそうにしている。

もしかして、今なら……。

俺がそう考える前に、蜘蛛(アラネーオ)は動いていた。

動きが鈍くなった蟲(ベステート)に向けて、糸を吐きかける。

「よしっ」

これで終わりだ。

俺は全くの役立たずだったけど、今回はスムーズだったな。まあ、蟲(ベステート)が現れるまで待たされたけど。その間に、俺の特訓ができたからよかったという事にしようか。

「あ、ダメ……」

キヨカが演奏をやめてしまう。

「おい……」

どうして演奏をやめちゃまうんだ。このままだったら……。

「ファイ、逃げて」

えっ？

同時だった。

苦しんで動きが鈍っていた蟲(ベステート)が、蜘蛛(アラネーオ)の糸を巻き付けたまま再び跳躍した。その先は、こっちだ。

「やべっ」

慌てて落下地点から離れる。

間に合う……か？

ギリギリすぎて、転がるように……っていうか、実際に転がって逃げる。

「おわっ」

なんとか避けきれたものの、蟲(ベステート)の着地の衝撃で体が浮き上がる。

このままだと、やられる。

「アーちゃん」

キヨカの声で、蜘蛛(アラネーオ)が俺を護るように糸を吐いてくれる。

しかし、蟲(ベステート)は俺の方ではなく、むしろ離れていく。

逃げる……のか？

どうやら、蟲(ベステート)は逃走を始めたらしい。

それを見て、少しホッとしている自分に気付く。

なに考えてんだよ、俺。

逃げられてるんだぞ。追いかけてでも封印しないと。

「ファイ、今回は諦めよう」

「……………ああ」

……………それがいいかもな。

そうこうしていると、蟲(ベステート)はもう見えなくなっていた。

「残念だったね」

「……………」

なにも言えない。

ただ見ているしかできなかった。

風伯を使えていたとしても、戦えたかどうかもわからない。

それに比べて、キヨカは見事に蟲(ベステート)の動きを止めた。

足手まといにしかなってなかった。

「ほら、お腹も空いたし、とにかくご飯だよ。さあ、行こう」

「あ、ああ」

キヨカに手を引かれて立ち上がる。

「しょぼくれないの。ファイだってきちんとやれてるよ」

「……………」

慰められるのって、なんだかな……。

でも、これが現実なんだよな。

「とにかくお腹いっぱい食べて、次頑張ろうよ。今日は、きっと当たりのお店だからさ。シータちゃんの勘は絶対なんだから」

「ああ、そうだな」

現実には現実として受け止めるか。

結局、キヨカに引っ張られるまま飲食街に向かい、入った店は中華風の料理でかなり当たりだった。

その翌日から、また特訓だ。

あの悔しさを二度と味わいたくない。

せめて、風伯の力を使えるようになっておかないと。

それだけでも、かなり違ってくるはずだ。

キヨカは、今日も演奏をしてくれている。

あの音が、本当に蟲(ベステート)に効果があったなんてな……。

でも、音で蟲(ベステート)と戦えるなんて思ってもいなかった。

蟲(ベステート)とは接近戦だけだと思っていたけど、これが有効だとわかれば、キヨカの音で遠距離からの攻撃もできるわけだ。

もっとも、音が届く距離にいないと意味ないけど。

それにしても、俺は完全に後れをとってるよな。

風伯を使えていたけど、今は使う事ができなくなってしまっている。

それに対して、キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を召還できるだけでなく、フルートの音で蟲(ベステート)の動きを止める事ができる。

さすが資格者(ティトーロン)ってところかな。俺なんかじゃ、役に立たないのかもな。

心 強固にせよ、

グジグジと考えていると、蜘蛛(アラネーオ)の声が聞こえてきた。

「えっ？ あ、ああ……」

予想もしない事に驚く。

つか、蜘蛛(アラネーオ)には俺の考えがわかってるのか？ もしかして、心が読めたりするのか？

「なあ、蜘蛛(アラネーオ)って心が読めるのか？」

「ん？ ……どうしたの？」

キヨカは演奏を中断する。どうやら、キヨカには蜘蛛(アラネーオ)の声が聞こえてなかったらしい。

「いや、さっき蜘蛛(アラネーオ)の音がしたんだ」

「アーちゃんの？ ……そうなの？ アーちゃん」

キヨカが蜘蛛(アラネーオ)に確認する。

「……本当みたいだね。でも、心は読めないって。なんか、そういう雰囲気だったから……らしいよ」

「そっか……」

そういう雰囲気ね……。

まあ、落ち込んでいるとか、後ろ向きな事を考えているとか、見てわかるほどだったんだろうな。

「わかった。ありがとな。蜘蛛(アラネーオ)もありがとう」

蜘蛛(アラネーオ)に言われたように、心を強くもとう。そうすれば、きっと風伯も応えてくれる

。

まあ、トラウマをどうすればいいのかわからないけど、グダグダと考えているよりはいいはずだ。

……………って、だからって、そう簡単に気持ちを切り替えるなんてできやしない。どうしても引きずってしまう。

「集中しろ。集中するんだ」

自分に言い聞かせて、素振りを再開する。

今は後ろ向きな事じゃなく、あの蟲(ベステート)をどうするか考えるんだ。

昨日は、キヨカのフルートで動きを止めて、蜘蛛(アラネーオ)の糸でぐるぐる巻きにしたけど、それでもそのまま跳躍してしまった。

最後の悪あがきだったのかもしれないが、動きを封じたのに封印できなかった。

あの状態で、あそこまで動けるなんて、相当手強い相手だ。

「待てよ……」

確かにあの跳躍は驚異だ。

しかし、逆に考えれば、あの跳躍を封じてしまえばいいんじゃないか？

あの跳躍を封じるには、あの後ろ脚だ。

なるほど、だな。

あの後ろ脚さえなんとかすれば、あの蟲(ベステート)はもう跳べないはずだ。

よし、それを中心に対策を考えよう。

攻撃を集中させる場所は決まった。だが、そこに攻撃するには、接近するしかない。

キヨカのフルートと蜘蛛(アラネーオ)の糸で、ある程度の動きは止められるかもしれない。だけど、接近して攻撃するのは、俺しかできない。

だとすると、俺がしっかりしないといけない。

だが、俺は今こんな状態だ。

風伯をまともに使う事ができていない。

俺が使いものになるようにならないと……だな。

「俺次第なんてプレッシャーだな」

少し前までなら、躍起になってたところだけど、現状だとそうはいかない。

無力さに打ちのめされてしまっている。

風伯さえ使えれば……。

実践でも、風伯の力を引き出せなかった。

焦るなと自分に言い聞かせても、どうしても焦りを感じてしまう。

他の作戦を考えるべきだろうか。でも、それ以外は思いつかないんだよな……。

だったら、俺が強くなるしかない。

よし、そうと決まれば、ひたすら鍛えるのみ。

風伯が応えてくれるように、俺は強くなろう。

成果がみえないまま、特訓の日々は続いた。

蟲(ベステート)はあれから姿を現さない。

発見できてはいないものの、確かにこの世界——この国にはいるらしい。それでも、正確な場所がわからない。

蜘蛛(アラネーオ)が感じるには、遠いような近いような、奇妙な感覚らしい。

そんな日々が、一週間、二週間と続いている。

かれこれ、一ヶ月近くをここで過ごしているという事になる。

それでも、風伯の力を引き出せていない。もしかしたら、このままなんじゃないかとさえ思えてくる。

だけど、キヨカと蜘蛛(アラネーオ)は、こんな俺を信じてくれている。

急かす事なく、ゆっくりとでもいいと見守ってくれている。

それに甘えているわけじゃないんだけど、実際そうになってしまっている。

最初の頃は、それがプレッシャーになっていたけど、今じゃ俺も気楽になってきたというか、肩の力が抜けてきている。

別に諦めているわけじゃない。

そう——無駄な力が抜けてきている。

それに、全く効果がないわけでもない。毎日素振りをしているだけでも、かなり違ってくる。

風伯を振る速さが上がったし、キレもよくなったと思っている。そう感じられるだけで、実際はどうかかわからないけどな。

「今日も頑張ろうね」

「ああ」

多少は、剣術の腕が上がったと思うんだけど、どうにも比較する事ができない。誰か手合わせしてくれればいいんだけど、そういう相手がいない。

キヨカだって、剣術の手合わせ程度ならできなくもないのだが、さすがにしばらく木刀すら持っていないので、腕が落ちているだろう。

この国に、そういう場所ってないのかな……。

「なあ、シータ」

「ん？ どうしたの？」

いつものように素振りをしながら話し掛ける。

「あのさ、この国って剣道場とかないのかな？」

「……もしかして、腕試しでもしたいの？ それとも、本格的に師匠が欲しいの？」

師匠か……それは考えてもなかった。

「前者かな。だけど、師匠か……それもいいかもな」

「そうだね。ずっと相手は蟲(ベステート)だったもんね。たまには、対人戦でもしたいよね」

「それもあるけど、やっぱ一人でしてると、上達してるのかとか、どの程度なのかってのがわからないんだよな」

「それはあるね。私だって、コンクールがないと、自分がどの程度なのかわからないかも。……  
まあ、私の場合は負けなしなんだけどね」

「……………そうだな」

こいつの場合、それが本当なんだよな。

コンクールに出場すると、金賞とか優勝とか、そういう最高の賞を確実にとるんだよな。ある意味じゃ、コンクール荒らしだ。もっとも、全てのコンクールに出ているわけじゃない。むしろ、キヨカの気が向いた時に出ているだけだ。

きっと、他の演奏者からすれば、キヨカが出場しているかどうかが大問題なんだろう。

まあ、キヨカが出場してなくてよかった……と安堵しているようじゃダメなのかもしれないけど、実際に演奏する側とすれば、やっぱり強敵がない方が、自分が優勝できるかもって思っちゃうよな。

色々スカウトもあつたらしいが、全て断っている。俺からすればもったいないんだけどな……。そこは、なにか考えがあるんだろう。

音楽業界の事はわからないが、そこまでコンクールに出ていると、やっぱりヨーロッパの方に留学とか、そういう有名な音楽大学に行くと思うし、それを目指している人が多いはずだ。

そういう人には、コンクールで優勝しておきながら、そういう事を全くしないキヨカは、どう映っているんだろうな。きっと、意味がわからないというか、奇人とでも思われているのかもしれない。

俺だって、そっちの方向に進めばいいと思うのだが、本人にその気がないのだから、俺が押しつけるわけにもいかない。

正直、俺だってキヨカの才能は羨ましい。妬んだ事だって一度や二度じゃない。

それでも、畑違いのせいかな、特に影響はないんだよな。まあ、自分が未熟だとか、才能がないと思っただけだし。

「じゃあ、そういう場所がないか、訊いてみようか」

「そうだな」

そうと決まれば行動あるのみだ。

案内所へ向かい、それらしい場所を訊く。

あいにくと、この世界には剣道なんてものはなかった。

剣術も武術としては存在しないそうだ。

だがこの世界には、戦争をしている国はあるとの事で、軍の訓練として剣を学ぶ事はあるらしい。しかし、騎士のような身分でない限り——つまりは傭兵クラスだと我流だそうだ。

他の国との国交がないこの国には、当然ながら他国との戦争というものはなく、そういったものを教える人物がいないらしい。

しかも、この国にはそもそも争い事がないので、そういうものを嗜(たしな)む人は少ないらしい。

それでも、そういう国からやって来る人もいるかもしれないので、もしかすると経験者はいるかもしれない。しかし、過去の詮索はできないので、それを確認する事はできない。

それでも、剣などを含む刃物を販売する店はあるとの事。

そういう話を聞いていると、一カ所だけそういう場所がある事が判明した。どうやら、最近登録されたようだ。

「よかったね」

「ああ」

あまり期待はしてなかったけど、やっぱりあると嬉しい。

これで腕試しができる。もしかすると、すごい使い手がいて、剣術を教えてもらえるかもしれない。直接教えてもらえなくても、見せてもらえるだけで……それだけでもどれだけいいか。

「行こう」

「そうだな」

教えてもらった場所は、こことは別のエリアだった。なので、移動手段が必要になる。徒歩で行けるか訊いたら、とてもじゃないが無理だと言われた。

徒歩なら一週間でも無理かもしれないとの事だ。

どれだけ遠いんだよ……っていうか、この国はどれだけ広いんだ？ そんな疑問もあるが、この国に住む人が言うわけだから、本当なんだろう。案内所の人が嘘を言うとも思えない。

そこで教えてもらったのが、列車での移動だった。

「この国に、列車なんてあるんだね」

「そうみたいだな」

まさか列車があるとは思ってなかった。それだけの技術はあるんだな。そういえば、この国に入るために名前を決めた時に、パソコンのようなものもあったな。それだけの技術があるなら、列車くらいはあるのか。

しかし、それでも数日掛かるらしい。

それだけ遠いって事か。

だいたい、列車で数日掛かる距離を歩くなんて、考えるだけで疲れるな。

それとも、列車がそれほど速くないのかもしれない。鈍行列車なのかもしれない。

「列車なんて久しぶりに見るね」

「そうだな……」

今までいくつか世界を旅したが、そういう世界は……あった。最初だ。あそこでは、移動の際に電車を利用している。

でも、それ以降はそういうものはなかった。

その久しぶり感もあるけど、きっとこの世界の列車というものは、俺たちが知っているものじゃないだろう。別に鉄道にそれほど思い入れはないけど、ちょっと楽しみだ。

「じゃあ、今日は旅行の準備だね」

「旅行の準備って……。俺たち、既に旅してるんだけどな」

「無粋だよ、ファイ。気分の問題でしょ。っていうか、一ヶ月くらい同じ場所にいたら、既に他の場所に行くのは旅行だよ」

「……まあ、わからんでもないな」

確かにここに部屋を借りて一ヶ月も住んでいると、ずっとここにいるような気になってくる。それをふまえれば、旅行って事でもいいのかな。

「でも、ちょっと待って」

「ん？ どうしたんだ？」

「その場所に行くのに数日だよな」

「まあ、具体的にはわからないけどな」

「うん。仮に三日で着いたとして、向こうにどのくらいいるの？」

「えっ？ どのくらいって……」

そういえば、全く考えてなかった。

「もしかしてノープラン？」

「うっ……」

言葉に詰まる。

「ファイ……しっかりしてよね」

「そう言ってもな、いきなり予定なんて無理だろ」

「そうかな……」

「向こうがどんな場所かわからないんだぞ。予定もなにもないだろ」

「……そうだね」

「わかってくれたか」

「じゃあ、向こうでとことん修行しよう。もちろん、教えてもらえただけど」

「……そうだな」

行ってみたものの、教えてもらえない場合や、門前払いって可能性もある。それに、教わるほどでない可能性だってある。

教わる事ができるなら、とことん教わりたい。

できれば、風伯の力を出し切る事ができるようになりたい。

そのためには、何日くらい掛かるんだろうな。

「じゃあ、プランは二つだね」

「ん？ 二つ？」

「そうだよ。教えてもらえなかったりした場合は、ちょこっと観光して帰ってこよう。多分、一週間もあれば大丈夫だと思うよ」

「……そうだな」

「もうひとつは、もちろん教えてもらう場合だよな」

「そうだな」

「そうになったら、ファイ次第だよな。ファイは、どのくらい時間が掛かりそう？」

「……わかるか」

そんなのがわかれば苦労しない。

「だよな。そうになったら、長期滞在かもね」

「そうなるな」

って事は、またどこかに部屋を借りないといけないのか。

「気付いた？」

「長期滞在するなら、また部屋を借りないといけないよな」

「そうだね。でも、二重に部屋を借りる余裕なんてないよ」

「そうだよな」

所持金を考えれば、そんな余裕はない。

「いっそ、引っ越す？」

その提案に、少し考えてしまう。

この場所に居続ける理由は……もしかしたらないのかもしれない。

蟲(ベステート)が現れはしたものの、この辺に再び現れてはいない。もしかしたら、別の地域なのかもしれない。その可能性があるいじょう、色々な場所に行くべきなのかもしれない。

だとすれば、住まいはその都度変えていかななくてはいけない。今回は、そのきっかけになるかもしれない。

「それもいいかもしれないな」

「向こうにも、美味しいお店があるといいんだけどな……」

「お前な……」

「ファイ、食べ物は重要だよ。美味しいものを食べれば、ストレス発散にもなるんだよ」

「まあ、確かにな」

それは確かに一理ある。

「シータは、引っ越してもいいのか？」

「今必要なのは、ここに居続ける事じゃないもんね。ファイが強くなる事が重要なんだよ」

「……………」

笑顔で言われると、涙が出そうになる。キヨカは、こんなに想ってくれてるのか。それなのに、俺は全く成長できていない。

だけど、その想いには応えないとな。

「わかった。引っ越すか」

「うん」

そうと決まれば、早速手続きをしようか。

再び案内所に戻り、部屋の引き払いと、移動手段の列車の確認をする。

列車は数日に一本しか出ていないらしく、次の出発は三日後らしい。なので、その日まで部屋を借りておく事にして、出発する事になった。

「じゃあ、それまでに、ここの美味しそうなお店を制覇しておかないとね」

キヨカはいつぞやの屋台のような事にならないようにするみたいだ。

「俺もここでできる事はしておくか」

もちろん、とにかく特訓だ。一人でできる事といえば、それくらいしかない。

引っ越しの準備をしたり——といっても、元々旅をしているわけだから、荷物はそれほどないし、常にまとめている——美味しい店散策をしたり、特訓したりをして、あっという間に当日となった。

部屋は元のような状態にした。

それでも、約一ヶ月をここで過ごしたわけだ。少しは愛着のようなものもあるので、なんだか淋しい。

「ファイ、行こうか」

「そうだな」

俺たちは部屋に別れを告げ、案内所で教えてもらった駅に急ぐ。

これに遅れるわけにはいかない。

「ファイ、急いで急いで」

出発自体は夕刻前だそうなので、まだ少しだけ余裕はあるだろうが、それでも駅までが遠いのだ。それに、早く到着しているのに越した事はない。

俺たちは乗り遅れないように急ぐ。

結局、駅に到着するのにかなり掛かった。時計がないので正確にはわからないが、二、三時間は掛かっているだろう。思っていたよりも遠かった。

それだけの時間、ずっと歩いていたので、足はガクガクだ。舗装された道ならまだマシだったのかもしれないが、そのままの地面だ。もっとも、キヨカはそういう道に慣れているので、俺の方が疲れている。第一、俺はあの重いスパイスも運んでるしな。

キャストがあっても、舗装路じゃないから、運びにくかった。

そんなこんなで苦労して駅に到着すると、まばらにだが人がいた。どうやら、それなりに利用する人はいるらしい。

この国の規模というか、人口はよくわからないけど、この駅には一〇〇人近くの人がいる。

「結構、人がいるみたいだね」

キヨカも同じ感想らしい。

「そうだな。田舎の無人駅みたいなのを想像してたんだけどな」

「私も。さすがに自動改札じゃないけど、ちゃんと駅員さんもいるしね」

「ああ」

まあ、さすがに無人ってわけにはいかないだろう。完全機械化にする方が困難だろう。

「あそこでお金を払うのかな？」

「どうだろうな」

駅員さんに利用方法を訊く事にした。

駅員さんは、目だけがある不思議な仮面で、ちょっと不気味だった。

どこへ行きたいんだ？ と訊かれ、地図を見せると、料金と乗る列車を教えてくれた。

片道で一人五〇〇〇〇謳華(おうか)もするのは予定外だった。そういや、料金を調べてなかったな……。

いきなりの出費に、キヨカはちょっと不満げだった。

「こうなったら、なんとしても教えてもらわないといけないね。この金額分は、ちゃんと吸収するように」

「……わかりました」

確かにそれなりの金額を払うのだから、きちんと無駄にならないようにしたい。

それにしても、手持ちが心許なくなっている。

「やっぱり、稼がないとダメだね」

キヨカは商売をする気満々だ。

「このスパイスを、どこか高く売れそうな場所に持ち込もう」

「そうだな」

まだ半分くらいなのに旅費が尽きようとしているなんて、浪費してたって事なのか？ それとも、準備金が……いやいや、結構な額はあったはずだ。だいたい、普通の生活をするだけなら、二人だとしても、月に一五〇〇〇〇くらいで生活できてたどろ。それを考えると、やっぱり浪費気味だったのかもな。物価の違いってのもあったのかも。

とにかく、節制だな。

そんな決心はともかく、俺たちは目的の列車を探していた。

ホームのような場所には、全部で六列車が停まっている。その内三列車は、客車が五両もあり、さらに五両の貨物車両まであった。

利用客の数からすれば、かなり大きなものになるだろう。採算とか大丈夫なのか？ ……なんて、俺が心配する事じゃないよな。

他の三列車は、客車が二両と貨物車両が三両あるものだった。

どの列車も、割ときちんとしているというか、見覚えがあるようなものだった。

ちょっとだけ、変な形というか、特徴があるようなものを想像していたんだが、あまりに普通で拍子抜けだ。

「すごいね……。まさか、こんなにあるとは思わなかったよ」

「そうだな。ってというか、どう考えても、満員電車って事にはなりそうにないな」

「そうだね」

実際、乗っている人もまばらだ。各車両に五人ほどしか乗ってないんじゃないだろうか。

しかし、貨物車両には、たくさんの荷物が積み込まれている。どうも、こっちがメインみたいだな。

出発は、全車両一斉らしい。線路が全て違う方向を向いているので、出発する光景を外から見ると、なかなか見応えがあるかもしれない。機会があれば、見てみたいものだ。

「あったよ」

「おお」

どうやら、俺たちが乗るのは客車が三両の方らしい。

別に座席指定があるわけでもないのに、先頭車両に乗り込む。

座席は四人対面のボックスタイプになっていた。

この乗客の数だし、二人で占領しても問題なさそうだな。

「なんだか、旅行してるって感じだね」

「そうだな」

都会の電車とは違って、風情があるというか、旅情たっぷりって感じだな。

それからしばらくすると、出発の時間になったらしく、大きな鐘の音が響いた。

そして、列車が一斉に動き出した。

線路が放射状になっているので、他の列車が動き出したのも見える。これはこれでいい感じだ

。

ゆっくりと動き出した列車が、それぞれの方向に向かって走っていく。

ただ、かなりゆっくりだな。走り始めだからかもしれないと思ったが、どうやらそういうわけじゃなさそう。走り出してから結構経っても、速くなる事はなかった。

「のんびりだね」

「そうだな。これじゃ、時間が掛かるのもわかるな」

「うん。なんだかじれったいよ」

「でもさ、歩くのを考えたら、こっちの方がいいだろ」

「そうだけど……。あれだけ高かったんだから、もっと速くてもいいと思うよ。もしくは、なにか食事のサービスとかさ」

「そうだな……。でも、なにもなさそうだけどな」

一応、乗務員として車掌らしい人は乗っているみたいだが、そういうサービスはあり得ないだろうな。

「そうだよな……」

と、キヨカは残念そうに窓の外を眺めていた。

だが、車窓から見える景色は荒野だった。

それは地図でもわかってはいた。

人が住んでいる街がある場所以外は、ほとんどが荒野になっていた。そこにあえて住んでいる人もいるらしいが、そういったものはほとんどなく、ただ荒れ地が広がっているだけだ。

その広さは、縮尺がよくわからないのだが、国土のほぼ全てがそういう場所になっているようだ。そういえば北の方には、巨大な山脈もあった。南の方は森が広がっているようで、俺たちが来たのはそこらしい。

近隣に国があるのかどうかは、この地図ではわからないし、誰かに訊いても教えてくれないだろう。なんとなく、それは禁句のような気がする。

列車は、森の近くの俺たちがいた集落を中心にして、各地に点在している集落に向かって走っているらしい。なので、どこ行きに乗っても、見える景色はそう変わらないのだろう。ただ、北の山脈に行く方角には、大きな湖があるようだ。それくらいしか、違いはなさそう。

ただ、出発が日暮れなので、辺りは薄暗く遠くまで見る事はできない。

昼間なら、それなりに綺麗なのかもしれないが、今はそれすらも望めない。  
出発した当初は夕暮れという事もあり、それなりに綺麗な景色が見えた。  
だが、すぐに日が沈んでしまったので、真っ暗でよく見えない。  
暗ければ星空が見えるんじゃないかと思ったが、ちらちらと見えるものの、ほとんど星は見えない。

俺たちの世界と違うので、その辺も違うんだらうな。

そういうわけで、車窓から景色を見ていても、すぐに飽きてしまう。

さらに、かなりの鈍行なので、イライラしてくる。

「もう、ファイ。なんとかしてよ」

「あのなあ、俺に文句を言ってもしょうがないだろ」

ってなわけで、キヨカのご機嫌はかなり斜めになっているようだ。

「ファイが風伯の力で、列車をぶわって加速させるとかさ。ほら、雪の上でやったでしょ」

「できるか、そんな事」

そんな事したら、あっという間に脱線事故だろ。あれは、雪の上だったからできた事だろ。

ってというか、俺は今、風伯の力が使えないんだった。ちょっと傷ついた。

「あ、別に他意はないんだよ」

「あ、ああ」

そのフォローは必要ないよな。余計にグサツときた。

「ファイ、ごめんって。本当に他意はなかったんだよ」

「あ、ああ。わかってるって」

「.....そうだ。もう寝ようよ」

話の変え方が強引だぞ。

だが、それがいいかもしれないな。

景色を見ていてもしょうがないし、結構歩いたので疲れてる。

乗り換えもないから、乗り過ごす事もない。そもそも、到着までまだまだ時間がある。ずっと起きている事もないだらう。

「そうだな。今日は休むか」

「そうしよう」

俺たちは荷物から毛布を取り出し、座席に横になって寝る事にした。

同じ車両には、他に乗客はいない。そもそも、俺たち以外に乗客の姿を見ていない。もしかしたら、貸し切り状態なのかもしれないな.....。まあ、荷物があるから、そうでもないのか。

なんて事を考えながら、俺たちは眠りについた。

翌朝、眩しさで目を覚ました。

ゆっくり走っているので、揺れも少なく、思ったよりも熟睡できた。

こういう時の癖というか、習慣化している荷物チェックをしたが、問題はなかった。

「ん、んん〜」

向かいで眠っていたキヨカも起きたようだ。

おはよう、と声を掛けると、欠伸をしながら、おふぁようと返してきた。

「ゆっくり眠れたみたいだな」

「うん。ファイは？」

「俺もぐっすりだったよ。ちなみに、荷物は大丈夫だ」

「そっか。ありがと」

キヨカが荷物をチェックしようとしたので報告する。

「まだ列車の旅は続くんだよね」

「そうだな。予定では、明日だもんな」

さすがに歩くよりは速いが、もしかしたら普通に自転車の方が速いんじゃないかって速度なので、かなりの時間が掛かる。それでも、距離を考えれば、これに文句を言うわけにはいかない。

「今度は、自転車旅しようよ。その方が早く着くんじゃないかな」

「同感だ。ただ、自転車があるかどうかだよな」

「.....そうだね。なんだか、なさそうな気がする」

「ああ」

そういうものは、前の集落でも見た事がなかった。もしかしたら、他の集落には、そういうものがあるのかもしれないけど、なんとなくなさそうな気がする。

なければ作ればいいとしても、俺に自転車を作る技術はない。なんとなくはわかっているけど、あれを組み立てると部品を渡されても無理だろう。

「ねえ、今日はどうする？　すごく暇なんだけど」

「俺もだよ」

丸一日、列車の中にいれば、退屈でしょうがない。

列車内を探検しようにも、するほどの広さはない。

かといって、外の景色を楽しむにも、外は荒野が広がっているだけで、景色に変化はない。すぐに飽きてしまう。

「トランプとかウノとか.....なにか持ってないの？」

「持ってるわけないだろ。そもそも、そういうのは、お前の方が用意してるだろ」

「そうだけど.....」

そういう娯楽関係は、キヨカが準備している事が多い。っていうか、こいつはその方向には抜け目がないもんな。

それなのに、そういう事を訊くという事は、そういう余裕がなかったんだらうな。そもそも、この旅でそういうものを必要とする時がなかったもんな。

「しょうがない。なにかお話でもしようか」

「なにについて語るんだよ」

一緒に旅をして数ヶ月。いまさら話す事はないだろ。旅の思い出なんて、一緒だしな。

話すとすれば、これからの予定か？

「そりゃ、恋バナに決まってるでしょ」

「恋バナ？」

予想外の答えだった。いったいなにを考えてるんだ？

「旅行で語る事といたら、恋バナに決まってるじゃない」

「そりゃ、修学旅行の消灯後の話の定番かもしれないけど……」

「それは怪談じゃないの？」

「……………まあ、それもあるけどさ」

なんだ？ ちょっと認識がズレてるのか？

確かに怪談もありだろうけど、恋バナの方がポピュラーじゃないのか？ 俺の思い込みか？

俺の感覚が古いのか？ それとも、男女の認識の差なのか？

「というわけで恋バナだよ」

「恋バナつってもな、俺とお前でなにを話すんだ？」

「……それもそうだね。私とファイだと、ただのラヴラヴトークだもんね」

「……………」

ぽか～ん。

開いた口が塞がらないな。

どこをどうすればそうなるんだ？

こういう時は、反論しても無駄なのはわかりきっている。さすがに学習したからな。

「ほら、なにか話そうよ。甘々でこそばゆいどころか、かゆくくなるような愛の語らいだよ」

どんな語らいをするつもりだ、こいつ。っていうか、どう頑張っても、そういう話にはならないと思うんだけどな……。

「そんな語らい、どうすりゃできるんだよ」

「普通に話してるだけで、かなりラヴラヴトークでしょ」

「……………」

「黙らないでよ」

「勝手にしてくれ」

起きているのも疲れるし、キヨカとそういうトークをするつもりもない。寝ようと思っ横になる。

「ファイ、寝ないでよ。もしかして、ピロートークがいいの？」

なにを言ってるんだ、こいつは。

「ファイって、たまに大胆だよな」

向かいの席で照れているのをちらりと見つつ、俺は眠る事にした。

起きたばかりで寝れるかってのが不安だったが、横になると自然と眠気が。

「ファイってば……。どうして寝るの？ ラヴラヴトークしようよ」

キヨカはなにかを言っているが、気にしたら負けだろうな。

「ねえ、ファイってば」

ゆさゆさと体を揺さぶられる。

ああ、せっかく眠れそうなのに。

「もう……起きてよ」

悪いが相手をするつもりはない。

今のうちに休んでおきたい。列車に揺られながらなので、どれだけ休めるかわからないけどな。

「本当に寝ちゃったよ……。さっき起きたとこなのに。……ってというか、お腹空いたんだけど。ねえ、ファイってば。お腹空いたよ」

キヨカがなにかを言ってるな。腹が減ったとか。

そういや、昨日からなにも食べてないのか。

「確かに腹が減ったかも」

むくりと起きる。

「あ、起きた」

「でもよ、なにも持ってないだろ」

「保存食なら少しあるよ」

「……そうだった」

以前に食料がない事を経験していたので、買えそうな場所を買っておこうとなって、買っていたんだ。乾燥させたパンみたいなものとか、ビスケットとか……。

「じゃあ、それを食べるか」

「……そうだね」

列車の旅なのに、こういう保存食ってのはどうかと思うが、食料はこれしかない。

当然ながら、食料車もなく、車内販売もない。旅をするには、そういう準備も必要だったようだ。

二泊三日でなにも食べないってのはつらいもんな。

キヨカは荷物から、乾燥パンを取り出す。

「ちゃんとしたご飯が食べたいよ」

「向こうに着いたら食べれるだろ」

人が住んでいるんだから、飲食店くらいあるだろ。少なくとも、食材を販売する場所はあるだろうから、なんとかするしかないか。

「美味しいお店があるといいけどな……」

「まあ、それはわからないな」

俺だって、美味しい店があるといいとは思うよ。できれば安くて美味しい店な。

「とにかく、今はこれしかないもんな」

「でも、これだってここで消費しちゃっていいのかな……」

「なにも食べないわけにはいかないだろ。また仕入れればいいだろ」

「そうだね。色々な世界の保存食か……。なんだか、コレクターに売れそうだね」

「そんなのがいるのか？」

「いると思うよ。世の中、誰がなにを集めてるのかわからないよ。そもそも、フィギュアとか、

私には理解できないよ。カードとかもそうでしょ」

「それは……………」

俺は集めてないけど、わからなくないんだよな。

男ってそういう嗜好があるよな。集めるのが好きなんだよ。だけど、キヨカにそれを言っても通じないだろう。

「別にいいけどね。でも、いるとしたら、結構いいかもよ。レアだし」

「そりゃそうだ。普通、違う世界になんて行けないからな」

違う世界のものだと思ってくれるかの方が疑問だ。見た事がないものなら、それだけで貴重に思ってくれると思うけど。

「じゃあ、もしかしたらここで売れるかもしれないよね」

「……かもな」

確かにそうなるかもしれない。この世界にはないものなら、物珍しくて買う人がいるかも。

スパイスの時もそうだが、すぐに商売に繋げるのは、才能なんだろうか。起業すると成功するかもしれないな。

「じゃあ、全部食べちゃわないで、いくつか売ろうよ」

「どのみち、全部は食べれないだろう」

「それはそうだけど……」

一応、二週間分という事で買っている。一食の量がそれほどないため、意外とコンパクトだ。

「まあ、いいんじゃないか。旅費もそろそろなんとかした方がいいし」

「そうだよね。やっぱり売ろう。それがいいや。だったら、少しでも多い方がいいよね。……………  
…お腹は空いたけど、我慢しよう」

「それはどうかと思うぞ。そりゃ、売るのも大事かもしれないけど、食べないで我慢するのはどうかと思うぞ」

「でも、これを高く売って、美味しいものを食べるならいいんじゃないの？」

「……………お前がいいなら、それでいいけどな。じゃあ、俺も量を減らすか」

「ファイはダメだよ。しっかり体を作らないと。風伯が振れなくなるでしょ」

「でもな……」

確かにそれを考えればそうなんだが……………。

「私は、主にアーちゃんが頑張ってくれるし」

「だけど、フルートを吹くのだって、結構体力を使うだろ」

「……ありがと。でも、大丈夫だよ。私は、美味しいもののために我慢するよ」

「だけどな……………。さすがに、向こうに着くまではするなよ。せめて、一食減らすとか、その程度にしておけよ」

「わかってるよ。回数と量を減らせば大丈夫だよな」

「それならいいと思うけどな。でも、無理はするなよ」

「ダイエットにもなるし」

「ダイエットするほどじゃないだろ」

「女の子は気になるんです。でも、ダイエットって、減らないで欲しい場所から減っちゃうんだよね……」

「そうなのか？」

ダイエット経験がないからよくわからない。

減って欲しくない場所ってどこなんだ？ っていうか、減らすのが目的なのに、減らないで欲しい場所なんかあるんだ。

「なに？ 質問でもあるのかな？ 乙女の重要機密だよ」

「まあ、それほどきになってるわけでもないんだけどな」

「ふうん。ちなみに、なにが訊きたいのかな？」

「だから、別にいいって言ってるだろ。それよりも、無駄に動くと腹が減るから、寝てようぜ」

「ファイってば……。省エネ生活もいいけど、それはそれで体が鈍っちゃうよ」

「しょうがないだろ。まさか、列車の中で素振りをするわけにもいかないだろ」

「誰もいないよ」

「それだけじゃないっての。狭い場所でする事じゃないっての」

「そっか……。で、なにが気になるわけ？」

「なんの事だよ」

「だから、なにか疑問に思ったんでしょ？」

ああ、ダイエット関連の事か。いつの間にか、話が戻っていたのか。

「別にいいっての。そんなのどうでもいいし」

「訊くは一時の恥、知らぬは一生の恥」

「……………なかなか、普段使わないような言葉を持ち出すのな」

「えっへん。シータちゃんは、ちゃんと言葉を知ってるんだよ」

「そうだな。でも、別にいいんだって」

一生の恥だろうが関係ない。

「そうなんだ。ファイは、一生恥ずかしく過ごすんだね」

「……………そうでもないだろうな。つうか、普通に生活してても、気になるような事じゃないだろうしな」

「それはどうだろうね……。常識を知らないと、やっぱり恥ずかしいと思うよ」

「いいよ、別に。常識を知らない人なんて、ざらにいるからな。誰かに迷惑を掛けない非常識なら、別にいいと思うぞ」

「……………ファイ、つまんない」

キヨカは、ぷいっと顔を背けて窓の外を見る。

「それにしても、どこまで続くんだろうね」

いきなり話題が変わったな。この唐突さについていけない事も多々ある。

「そうだな。かなり広い国だよな」

今までの世界で訪れた国や街の規模はわからないが、ここはかなり大きいと思う。実際、これだけの移動をするなんて、他ではなかった。

そんなに速いわけでもないけど、二日近くかかる距離ってというのが想像できない。

自転車で旅をした事があったら、だいたいの距離ってわかるんだろうけどな。

「やっぱり、私も寝るね。その方が、カロリー消費が少ないし、食べる量も少なくなるよね」

「それがいいんじゃないか」

寝てても腹は減るけど、我慢もできるだろう。

「それに、景色も面白くないし。着いた先で商売だよ」

「……………そうだな」

商魂たくましいというか、意外と商売人気質なのかな。

キヨカが起業したら面白いだろうな。

「おやすみ」

そう言って、キヨカは横になって眠る。

「おやすみ」

俺も一眠りする事にした。

一日中、特に病気でもないのに寝るなんて、贅沢というか、浪費というか…………。

まあ、他にすべき事がないってのが大きいよな。

これは体力温存という行為だ——という事にしておこう。

なんだかんだで眠ってしまい、目が覚めた時には既に夜だった。

だけど、起きていてもしょうがないので、結局また眠って、本格的に起きたのは、朝だった。

「おはよう」

「ああ、おはよう、シータ」

こきこきと体をほぐす。なにせ、ほとんど丸一日眠っていたんだ、体のあちこちが硬くなってしまっている。

軽く体操をしてほぐしていると、腹の虫が鳴った。

「お腹空いたね」

二人して笑う。

「そうだな。さすがに一日なにも食べてないと、腹も鳴るよな」

考えてみれば、ずっと眠っていたので、なにも食べていない。昨日の朝にちょっと食べただけだ。

「でも、もうちょっとで着きそうだから、我慢しようね」

「……………あ、ああ」

キヨカからそういう言葉が出るとは思わなかった。それだけ、商売するのに本気って事か。

だけど、腹減ったな…………。ちょっとくらい食べてもいいんじゃないか？ 口にしても却下されるんだろうけど。

でも、キヨカが我慢してるのに、俺だけ食べるわけにもいかないよな。しょうがない。ここは一蓮托生か。

それからしばらくして、ようやく駅に到着した。

長い旅だった……。こんな長時間、列車に乗る事なんかなかったからな……。なんだか、一生分乗った気分だ。

「やっとだね」

「ああ」

これほど駅に着いて嬉しかった事ってあるだろうか。普段、通学とか遊びに行く時に乗っても、そんな事を考える事すらなかった。なんとも奇妙な心境だ。

さすがに、出発した駅よりは小さいものの、なかなかの規模だ。やはり貨物が主らしく、荷受け場がかなり大きい。人はついでだろうな。

ホームに降り立つと、荷物を運ぶ人たちが行き交っている。

もちろん、全員が仮面をかぶっているので、その光景はなかなか不気味だ。

普段、キヨカ以外とはあまり会う事はないので、こうして仮面をかぶっているのにまだ慣れない。

「ファイ、行こうか」

「そうだな」

俺たちはまず寝床の確保をしないとイケない。

この街の案内所を探さないとな。

「すみません、案内所はどこにありますか？」

そんな事を考えていると、キヨカが既に訊いていた。

「ああ、それならあそこだよ」

と、黄色い馬のような仮面の人は、駅の隣にある建物を指していた。

「ありがとうございます」

キヨカはお礼を言って戻ってくる。

「ファイ、わかったよ」

「ああ、シータは仕事が早いな」

「そりゃそうだよ。する事はたくさんあるんだよ」

なんだか、キヨカはかなりやる気になっているようだ。それとも、俺が冷めてるだけか？

「ほら、行こう」

キヨカに先導されて、案内所に向かう。

案内所には、白い仮面の人がいた。

「この街は初めてかな？」

「は、はい……」

思わず一歩下がってしまう。

というのも、その人の仮面は、真っ白い無表情の顔なのだ。はっきりいって怖い。

「観光ですか？ それとも滞在ですか？」

「えっと……期間は未定なんですけど、しばらくこの街で過ごしたいんです。それで、短い単位で借りられる部屋を探しています」

「そうですか。少々お待ち下さい」

端的な話し方が、仮面と妙にマッチしていて、さらに怖い。

「ファイ……。私、もう無理かも」

色々な手続きをして入れていたキヨカだが、どうもギブアップらしい。

「ファイ、あとはお願い」

「……あ、ああ」

気乗りはしないが、キヨカにばかり任せるともな……。ここは、いっちょ頑張ってみますか。

「そうですね。五日毎の更新でよろしければ、こういった部屋がございます。十日毎の更新でしたら、こういったものもございます」

と、いくつか部屋を紹介してくれる。

「この街の地図ってありますか？」

「こちらをどうぞ」

すぐに出してくれた。

「その部屋は、どの辺りですか？」

「そうですね……」

案内所の人、居住区と書かれた場所をいくつか指す。どの部屋もそれほど離れているわけじゃないらしい。

「シータ、どこか希望はあるか？」

「そうだね……。店舗区っていうのが、色々なお店がある場所だよね。ここって、飲食店もここにあるんですか？」

「ええ、もちろん。この街は、観光に来られる方も多いです。綺麗な自然が広がっていますし、様々な遊具を集めた場所もございます。なによりも、天然の湯浴み場が、最大の人気でしょうか」

天然の湯浴み場って、それって天然温泉って事か？ 予想外の単語だな。

ここってそんなに人気の場所なのか。

それにしても、列車には誰もいなかったけどな。

「ただ、ここに観光に来られた方は、だいたい永住を望まれまして、他の街とも離れているせ

いで、なかなか情報が他の街には伝わらないようですね。稀に帰られた方が、広めてくれているようですが」

「は、はあ……」

そんな事情は正直どうでもいい。っていうか、それって、観光客が多いって事なのか？ でも、列車に人が少なかった事は理解できるな。

実際、俺たちはそんな事は知らなかったわけだし、案内所の人も教えてくれなかった。

きっと、この人たちがそう思っているだけなんだろう。ただ、一度来たら永住したくなるような場所だっただけなのは本当だろうな。

「私は、どの部屋でもいいよ。間取りもそんなに変わらないみたいだし、設備も同じみたいだもんね」

「そうですね。今回ご紹介させていただいている部屋は、どこも管理者は同じです」

「そうなんですか。料金も契約日数からすれば同じだし、どうする？」

「ファイが決めちゃってよ」

「いいのか？ 後でなんも言うなよ」

「わかってるよ」

本当だろうな。

じゃあ……という事で、俺は五日毎更新の部屋をチョイスした。日割りにすると、十日更新と変わらないんだよな。面倒は倍になるけど、こっちの方が移動する事があった時は身軽だ。

「それでは、部屋にご案内します」

「その前に」

案内所を出て、部屋に向かおうとしたのをキヨカが止める。

「なんででしょうか？」

「お店を出そうと思うんですけど、どうすればいいんですか？」

「そういや、出店も考えてたっけ。」

「どういった店舗でしょうか？」

「えっと……保存できる食品を販売したいんです」

「それは調理したものというよりも、原料という事でしょうか？」

「ある意味じゃ調理済みですけど」

「そうですね……食品店舗は、まだ空きがあったと思うのですが……」

「それって、申請したものしか販売できないんですよね」

「そうですね。違う商品を販売されるのでしたら、事前に申請をしていただかなくてははいけません」

「わかりました」

違うものを販売するにしても、俺たちが売るものってスパイスと保存食くらいだぞ。他にはなにも持ち合わせていない。

もしかして、なにか仕入れて加工して売るつもりなのか？

「ありました。かなり端の方ですが、よろしいですか？」

そう言って示された場所は、本当に端の方だった。もちろん、飲食店に近い場所から埋まっているので、俺たちの店が一番遠いという事になる。

店舗の大きさもかなり小さい。屋根はあるようだが、テーブルが一つと椅子が二脚あるくらいだ。

なんだか、同人のサークルみたいな大きさだ。

でも、売るものがほとんどないわけだから、そのくらいあれば充分か。

その隣の区域には、被服店舗が並んでいるようだ。

「そこでいいです」

「わかりました。それでは、店舗を登録させていただきます」

「ちなみに、閉店する場合はどうすればいいんですか？」

早速、店じまいの事か。でも、俺たちが売るものって、ほとんどないわけだから、すぐ完売閉店って事もあるんだよな。そうなればいいんだけど。

「それは、こちらに連絡していただければ結構です。それでは、店舗の賃料は日割りにされますか？ それとも期間毎にされますか？ もちろん、期間毎の方が多少お得ですが」

まあ、やっぱりそういうお金は必要だよな。

ちなみに、期間割りだと十日で一〇〇〇〇〇謳華(おうか)で、日割りだと一二〇〇〇謳華(おうか)だ。

なかなかの金額だ。

実際の店舗の賃料なんか知らないけど、俺からすればぼったくりのような金額だ。

利益としてそれだけ稼ぐのは、かなり難しいんじゃないだろうか。商売なんかした事がないから、よくわからんが。

「日割りで」

キヨカは即答だった。

「おいおい、いいのかよ」

「大丈夫だよ。こんなの即完売なんだから。無駄に借りる必要はないもんね。むしろ、一日でもいいくらいだもん」

「それはどうだろうな……」

キヨカのその自信は、どこからくるもんなんだろうな。

「それでは、こちらに署名をお願いします」

店舗契約書らしい書類を渡され、キヨカがそこにサインする。

「それでは、お部屋と店舗にご案内します」

「お店の営業は、明日からしかできないみたいだね。でも、明日で即閉店させるつもりだけど」  
部屋に到着して、キヨカはベッドに寝転がってくつろいでいる。

「すげえ自信だな」

俺も荷物を置いて、ベッドに腰掛ける。

店舗を案内され、実際に見てみたが、想像通りの手狭さだった。

「でも、あれだけあれば充分だけどね」

「まあな」

まさか、自分たちで店を開くなんて思ってもいなかった。

高校時代にもそういう経験はない。文化祭で、そういうものを出していたクラスもあったけど、俺たちがしたのは、研究発表とか、舞台演劇とかそういうものばかりだった。なので、ちょっと憧れはあったんだ。

「お店は、私がするから、ファイは剣の修行だよ」

「……………」

俺も店をしたい。

そう言い出せそうにないな。なにせ、ここに来た目的は、遊ぶためでも、観光するためでも、商売するためでもない。俺の修行のためだ。

「わかったよ」

残念だが、ここはキヨカの言うとおりにしよう。

「というわけで、ファイは明日は剣術の勉強だよ。教えを請うてきてね」

「ああ」

部屋を案内してもらった時に、その場所については訊いている。

道場として店舗登録もされているようで、教育区という区域にあるそうだ。

店舗って事は、やっぱり授業料がいるんだろうな。タダで教えてくれる……なんて事はないよな。

「じゃあ、早速美味しいものを食べに行こう」

「そうだな」

なんだかんだで、俺たちはここ数日まともに食べていない。そのせいで、空腹を逆に感じなくなっている。

「久しぶりだから、胃がびっくりしちゃうかもね」

「……程々にな」

キヨカの場合、そういう事がありそうなんだよな。俺も自重しよう。

「飲食区を目指すよ」

「おーっ！」

なんだか妙にテンションが上がる。

「……ふう～、満足」

部屋に戻ってきたキヨカは、ベッドに横になって腹をさすっている。なんだろうな、この色気のないさ。オヤジくさいっていうか……。

「もうちょっとなんとかならないのか、それ」

「ん？ なにが？」

こくと首を傾げられる。

「その格好だけどさ、もうちょっと年頃の女の子らしくっていかさ……」

「いいじゃん、別に。ファイ相手だったら、猫被る必要なんてないもん。素のシータちゃんを見せられるもんね」

「それでもだな……」

いくら家族でも、こういうのって節度があるだろ。まあ、キヨカとは家族ってわけじゃないけど。

「こういう姿を見せられるのって、本当に親しい家族みたいな人だけだもん。私にとっては、ファイだけだよ」

「……………」

なんだかそう言われると、なにも言えないんだよな。

「光栄に思っているんだよ。それに、家族みたいって言ったけど、家族同然だし、本当の家族になってもいいんだよ」

「……………まあ、好きにすればいいさ」

「もちろん、ムラムラってきたら言ってね。私はいつでもいいよ」

「それはそうと、明日は別行動になりそうだな」

こういう話ばかりなので、話題を強制的に変える。

「もう……。でも、そういえばそうだね。初めてかもしれないね」

「そっか。そうなるのか」

「厳密には、寝たままのファイを放置して、屋台に行ったりとかした事あるけどね」

「そういやそうだな。でもさ、別行動っていいのか？」

「ずっと一緒にいろって言われたけど、大丈夫なんじゃない？ 今回に限っては、別行動の方が効率がいいよ。それに、明日だけだし」

「その自信はなんだ？ 一日であの量を完売させるつもりか」

「当然だよ。その自信はあるね。ファイだって、買う時にスパイスの味は確認したでしょ」

「ああ」

確かに旨かった。スパイスの調合はわからないが、旨い事は確かだ。

「だから大丈夫だよ」

「だけど、それって食べてもらってこそだろ」

「そうだね……確かにそうかも。その辺は、ちょっと様子を見て考えるよ。試食用はちゃんと用意できてるわけだし」

そうだった。お土産用と販売予定用とは別に、一瓶は試食用だったっけか。

「ファイは心配しないで、私に任せなさい。ファイこそ、ちゃんと指南を受けないとダメだよ。門前払いなんて、以ての外なんだから」

「授業料が必要だとしたら、来る者拒まずだと思うんだけどな……」

「そうだろうね。生徒は多い方がいいもんね」

「まあ、その辺は明日行ってみないとわからないけどな」

だけど、多分大丈夫だと思う。根拠はないけど。

「というわけで、明日だけだろうから、別行動は大丈夫だよ」

「そういう事にしておこうか。とにかく、今日は休むか」

「正直、あんまり眠くないんだけどな……」

確かに列車でずっと寝てたからな。

だけど、こうしてちゃんとベッドに横になれるのはいいよな。

「それでも寝ないとな」

「うん、わかってるよ。じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

眠気はないと思っていたけど、横になればやっぱり眠ってしまった。

「じゃあ、行くか」

「うん」

翌日は、すっきりと目が覚めた。今日の事に興奮していたんだろうか、それとも単純にそれまでに寝すぎたせいだろうか、目が覚めたのはまだ陽が昇る前だった。

今日は、キヨカは店舗区でスパイスと保存食の販売。俺は道場へ行き、剣術の指南を受ける。

「まずは店だな」

「お願いね」

まずはスパイスを店舗に運ぶ。それから、俺は道場に向かう事になっていた。

早朝なので人が少ないかと思いきや、店舗区に行くの大勢の人がいた。ほとんどの人は客というわけではないようで、それぞれの店の開店準備をしているようだ。

近くの市場で仕入れてきたものを運んでいる人もいる。

そうかと思えば、離れた場所にある飲食区からは、既にいい香りがしている。

「お腹空いたね」

「そういやそうだな。まずは腹ごしらえだな」

「うん」

俺たちは荷物を持ったまま、手近な店舗に入った。

「すごいね……」

「ああ」

そこは既に大勢の客がいた。その誰もが、同じようなものを食べている。

「あれって、お粥かな……」

「そうみたいだな」

トッピングというか、色々な具がのっている。これは美味しそうだ。

俺たちは、人気の粥を注文して食べた。

「美味しかったね」

「ああ」

店の回転はかなりいいようで、みんなすぐに食べて出ていく。俺たちも数分で食べ終わって出るのだが、すぐ次の客が入ってくる。

かなり繁盛しているようだ。その客のほとんどが、この辺で働く人らしい。店を出るとそれぞれの店に向かっている。

「じゃあ、私たちも準備だね。新装開店閉店セールだよ」

開店早々閉店ってのはどうなんだろうな。だけど、キヨカはそうするつもりらしい。

店舗の鍵を開け中に入る。中といってもなにもない。でも広くもない。本当に座る事ができて、ストックも少しだけ置ける程度だ。

「狭いけど、今日だけだと思えばなんでもないね」

そんな事を言いつつ、スパイスを並べていく。といっても、全部を並べるわけじゃない。五つほど並べただけだ。

後は、全部ストックだ。

その横には、保存食を並べる。

こちらはそれぞれ一種類ずつ。残りはストック。

それらを並べ終わると、いつの間に作ったのか、値段を書いたPOPを前に置く。

「……おい、マジか？」

そこに書かれている金額を見て驚いた。

その金額は、最初買った時の倍以上の値段だ。スパイスに至っては三倍だ。

「マジもなにも当然だよ。これでも安いと思うよ」

「だけどな……」

「ファイはお店の事をわかってないね。利益はこれくらいないと成立しないんだよ。もちろん、全部がそういうわけじゃないけど、このくらいは許容範囲だよ」

「そういうものなのか？」

俺は商売をした事がないから、そういう事はわからない。普段、スーパーとかコンビニなんかで買っているものとか、ちょっと考えてしまうよな。

だいたい、メーカーが決めてる希望小売り価格ってやつなんだろうけど、その店で作ってるものとかあるもんな。コンビニのおでんとか肉まんとか……。ああいうのも、こういう感じなのか？

元の世界に帰ったら、ちょっと商業科のヤツに訊いてみようかな。

「そういうものだよ。第一、ここにあるのは、全部この世界じゃ手に入らないものばかりだもん。それを考えたら、これでも安いくらいじゃないかな」

それはあるかもしれない。稀少価値を考えれば、問題ないのか？

骨董品みたいな感じで。いわゆるレアアイテムだもんな。この程度はありなのか？ さすがに、詐欺ってわけでもないもんな。ぼったくり……かどうかは、買う側が納得すれば、そうじゃない気もするし……。

「とにかく、こっちは私に任せて」

「まあ、頑張れ」

とにかく俺にはよくわからない。

口出ししない方がいいだろう。

金額に関しては、買う方がこれでいいと思えばいいわけだ。売れなかったら、キヨカだって値段を考えるだろう。割引とか、そういうタイムセールなんかもいいかもな。

「ほら、ファイは道場だよ」

そんな事を考えてると、キヨカは俺を追い出す。

「ファイがなにかを考えてるのはわかるけど、私は私の考えですから。もし私の考えで失敗したら、その時は手伝って。ね」

「あ、ああ」

そこまで考えてるなら、ここはキヨカに任せた方がいいかもな。

「じゃあ、俺は俺で頑張ってみるわ」

「弱音を吐きたくなったら、ちゃんと聞くからね」

「そんなのいらねえよ」

行ってきます、と言って道場に向かう。

教えてもらった場所は、店舗区から少し離れた場所だ。

教育区と命名されているその場所には、学校のような施設があった。

そういや、この国に来てから子どもって見てないな。

もっとも、人に会うのは飲食店くらいなものなんだけど。さっきの店舗区では、さすがに子どもはいなかったし。

でも、こうして学校のようなものがあるわけだし、こうして教育関係をまとめるくらいだから、子どももいるんだろう。

だけど、やっぱり子どもの姿はない。朝早いって事はないだろうけどな……。

俺たちの感覚でいえば、今くらいの時間なら、学校に向かう子どもがいるような時間だ。正確な時間はわからないんだけど。

店舗区とは違い、人とすれ違う事もない。

どこも静まり返っている。

「誰もいないって事はないよな」

建物はあるけど、未使用って可能性もある。だけど、外観からはよくわからない。

そんな通りを抜けていくと、目的の場所が見えてきた。地図からするに間違いないだろう。

教育区の隅にそれはあった。

さすがに日本家屋のようなものは想像していなかったが、そこは一見するとただの小屋にしかならない。

「ここで間違いない、よな……」

ちょっと心配になってくる。どこかで道を間違えたか？ でも、迷うほどややこしい道でもない。

心配しながら近付いていくと、

「はっ！ やっ！ はっ！ はっ！」

小屋の中から、はきはきとした声が聞こえてきた。

どうやら間違いなさそうだ。

「声からするに女の人か」

この人が道場主かはわからないが、聞こえてくるのはこの人の声だけだ。

可能性としては、師範が別について、生徒のこの人の声だけが聞こえてきている場合もある。だけど、なんとなく俺にはこの声の人が、この道場の主だと思えた。

「失礼します」

思い切って、小屋のドアをノックする。

「はい。どちら様ですか」

さっきの声だ。

「っ！」

ドアが開けられた瞬間、相手の顔に――正確には相手の仮面に慄いて逃げ出したくなった。

その人の仮面は、蛙のような雰囲気、目のようなものが四つある。しかも、右半分は紫色で左半分は黒色だ。

ゲームなんかにこんなモンスターがいそうだな。

ちょっと――いや、ちょっとどころじゃなくかなりグロテスクな仮面だ。

女の人がこういう仮面をチョイスするなんて、センスの問題なのか？

「あなたは？」

「あ、あの……俺はですね」

仮面のあまりのインパクトに、言葉が出てこない。

「なにかご用ですか？」

仮面に似合わず、声は可愛らしいのがミスマッチすぎる。

声の感じからして、結構若そうだ。

「えっと……そのですね。あの……」

別に告白をするわけじゃないのに、どうしてこんなにテンパってるんだ、俺。

落ち着け。落ち着け。落ち着け……。

蛙っぽい仮面の人は、じっと俺を見ている。

「あの……ですね。剣術を習いたいんです」

意を決して口にする。

言えた。言えたぞ、俺。

「教えて欲しい？ ……………？」

蛙っぽい仮面の人は、ゆっくりと俺の言葉を咀嚼するように考え込む。

「あの……それって、わたしに剣を習いたって事？」

「は、はい」

「それって、ここで？」

「はい」

「わたしに？」

「はい」

なんだ、このやり取り。だけど、どうやら向こうもテンパっている感じだな。

「ここって、剣術を教えてくれるんですよね」

「え、ええ。もちろんよ。わたしがきちんと指導するわ」

「じゃあ……お願いします」

「は、はひっ」

声が裏返っている。

大丈夫なのか、この人。



心の歌を奏でて 一仮面の国一 ㊤

<http://p.booklog.jp/book/90662>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90662>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90662>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ